平成２６年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研 究 報 告 書

【第３年次】

平成２９年３月

学校法人　名城大学
名城大学附属高等学校

はじめに

学校長　岩　崎　政　次
IWASAKI　Masaji

本校は 1926（大正 15）年に名古屋高等理工科講習所として開設され，2016（平成 28）年には開学 90 周年の節目を迎えました。戦後の新教育制度になってからは，普通科・商業科・電気科・機械科の 4 学科体制の男子校として新たに出発しました。その後，1999（平成 11）年に専門学科を総合学科に改組するとともに，普通科の一部を男女共学にし，段階を踏みながら 2004（平成 16）年に総合学科を男女共学にすることにより，全学の共学化が完了しました。2014（平成 26）年には，従来から国際クラスで行ってまいりました課題探究型学習や英語学習を発展させることにより，スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受けることができました。

SGH 事業の中核をなす国際クラスは，2003（平成 15）年に名城大学の 8 番目の学部として人間学部が発足するのに合わせ，高大一貫 7 か年教育のパイロットケースとしてスタートしました。本クラスは，当初より，生きた英語力の獲得と異文化理解を目的とした「ニュージーランドへの修学旅行」，実用英語技能検定・TOEIC 等の「資格取得」，各自が設定したテーマに基づいた 8,000 字以上の「課題研究論文の作成と英語での発表」の 3 つを特色とし，7 年後を見通したキャリア教育を実践してまいりました。

SGH 指定により，「愛知県産業を基盤としたグローバルビジネス課題」を研究課題として課題探究活動の一層の深化を目指しています。初年度の 2014（平成 26）年度には，開発と環境，協働・共生，といったグローバル課題をテーマに実施したインドネシアやアメリカでの「海外研修」，SSH 事業と共同して現代社会の諸問題についての講演や座談会等を行う「グローバルリーダー講座」，社会の諸問題について国際的な視野を持ちつつ自分自身で考えて判断ができるような素養を高めることを目的にした「グローバルサロン」を展開することができました。

本年は指定 3 年目となり，昨年度の取り組みに加えて，探究活動を実践している各県の高校生同士が協働して多面的・複合的に課題を捉えることを通じて，地域発のグローバルリーダーとしての成長を促すことを目的とした「Meijo Global Festa 2016」を主催し，生徒間の交流を図ると共に文部科学省の協力を得て，各校の SGH 担当者や国際教育担当者が一堂に会して意見交換を行う「カンファレンス」を行うことができました。加えて，歴史的にも日本と関わりが深く，日系企業も多く進出している台湾での研修を実施しました。

これまでに国際クラスで取り組んだ課題探究型の学習は，文部科学省が提唱する，これからの社会で求められる「新しい学力」につながるものであり，SGH の指定を機に，さらなる充実を図りながら，課題探究型の学習を国際クラスだけでなく普通科文系に広げてきました。

また，指定 3 年目の中間評価では 6 段階中最高の評価をいただき，12 月に行われた「SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL 第 1 回全国フォーラム」で取組紹介をさせていただく機会を得ると共に，SGH 指定校・アソシエイト連絡会の分科会では「生徒の資質変容の定量的評価」というテーマで 50 名程の参加者がグループに分かれて，各校の実態に合った生徒の評価項目作りを行いました。

今後，目まぐるしい社会の変化が予測され，教育現場にもその変化への対応が求められています。SGH 事業は，生徒にとっては未来のグローバルリーダーへと成長する機会として，教員にとっては研鑽を積む機会が与えられることで指導的人材として成長する機会として機能しております。自校の過去の実践・研究から得ることができた成果と，指定校を始め各学校間の強い連携体制を生かし，これからも SGH 事業に取り組み，普及に努めていきます。

最後になりましたが，本研究の機会を与えていただいた文部科学省，事業の運営にあたり指導と助言をいただいた愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会及び SGH 運営指導委員会の委員並びに学校評議員等，関係の皆様方に厚くお礼申しあげます。また，高大協働教育の推進に積極的かつ献身的に取り組んでいただいた名城大学の教職員及び探究活動の実践に協力いただいた愛知県企業・団体，他大学の皆様，TA 等で協力いただいた学生・OB・OG の皆様に感謝の意を表します。

目次

＜1＞ 平成 28 年度 SGH 研究開発完了報告 ・・ － 1 －
＜2＞ 中間評価を振り返っての今後の課題 ・・ － 8 －
＜3＞ 本校について・・・ － 9 －
1 学校の概要 ・・－ 9 －
2 教育目的 ・・－ 9 －
3 教育方針 ・・－ 9 －
4 生徒数とクラス数（平成 28 年度） ・・－ 9 －
＜4＞ スーパーグローバルハイスクール構想の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ － 10 －
＜5＞ 実施報告書：研究開発完了報告の詳細 ・・ － 12 －
1 研究開発名 ・・－ 12 －
2 平成２８年度（第三年次）の研究開発実施計画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・－ 12 －
3 管理機関の取り組み・支援実績・・・－ 13 －
3（1） 実施日程・・ － 13 －
3（2） 実績の説明・・・ － 13 －
3（2）-1 授業における連携 ・・・ － 13 －
3（2）-2 研究発表会における連携 ・・ － 14 －
3（2）-3 グローバルサロン（以下，G サロン）における連携 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ － 14 －
3（2）-4 グローバルリーダー講座における連携・・ － 15 －
3（2）-5 グローバルパスポートにおける連携・・・ － 15 －
3（2）-6 SGH 運営指導委員会の開催・・ － 15 －
3（2）-7 海外研修における連携 ・・・ － 16 －
4 研究開発の実績 ・・－ 17 －
4（1） 実施日程・・ － 17 －
4（2） 実績の説明・・・ － 18 －
4（2）-1 探究学習に関わる授業 ・・・ － 18 －
4（2）-2 海外研修・・・ － 28 －
4（2）-3 ローカルフィールドワーク・・・ － 35 －
4（2）-4 Meijo Global Festa ・・ － 37 －
4（2）-5 グローバルパスポート ・・・ － 40 －
4（2）-6 グローバルサロン ・・・ － 42 －
4（2）-7 グローバルリーダー講座 ・・・ － 44 －
4（2）-8 SGH 運営指導委員会の開催・・ － 44 －
4（2）-9 成果の公表・普及 ・・・ － 44 －
4（2）-10 事業の評価 ・・ － 45 －
4（2）-11 報告書の作成 ・・・ － 47 －
4（2）-12 他校との連絡・交流 ・・・ － 47 －
5 目標の進捗状況・成果・評価・・－ 48 －
5（1） 【研究開発目標①】・・ － 48 －
5（2） 【研究開発目標②】・・ － 49 －
5（3） 【実践目標①】・・ － 51 －
5（4） 【実践目標②】・・ － 56 －
5（5） 【実践目標③】・・ － 58 －
5（6） 【実践目標④】・・ － 60 －
5（7） 【実践目標⑤】・・ － 61 －
5（8） 【実践目標⑥】・・ － 63 －
＜6＞ 平成 28 年度入学生 普通科 教育課程表 ・・・ － 65 －
＜7＞ 生徒作成物・・ － 66 －

＜1＞　平成 28 年度 SGH 研究開発完了報告

（別紙様式 3）

平成　年　月　日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住　　所　　愛知県名古屋市天白区塩釜口一丁目 501 番地
管理機関名　学校法人　名城大学
代表者名　　理事長　小笠原　日出男　　印

平成 28 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を，下記により提出します。

記

1　事業の実施期間
平成 28 年 4 月 1 日（契約締結日）～平成 29 年 3 月 31 日

2　指定校名
学校名　　名城大学附属高等学校
学校長名　岩崎　政次

3　研究開発名
高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

4　研究開発概要
愛知県の地場産業に根差したビジネス課題を軸に,「人間開発」,「CSV（共通の価値創造）」,「コンフリクト・レゾリューション」,「協働・共生」の観点を学びつつ，高大・産学の連携・協働の探究活動を実施する。

PBL（Project Based Learning の略）を用いた「総合的な学習の時間」と学校設定科目，課外活動を融合させたサービスラーニングを通じて課題研究を行い, スキルとマインドセットの育成, グローバルシチズンシップの獲得を目指す。国内と海外でのフィールドワークで調査及び研究活動を行う。また，大学・他指定校を招聘して「Meijo Global Festa」を開催し，グローバルな課題について議論するとともに，研究成果を発表する。

学習評価には，パフォーマンス評価を用いる。スキルとマインドセットの変容等についてはアンケートを用いて検証する。

5　管理機関の取り組み・支援実績

5(1)　実施日程

業　務　項　目	実　施　日　程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1　授業における連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
2　研究発表会における連携						▶▶	▶	▶			▶	
3　グローバルサロンにおける連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	▶	
4　グローバルリーダー講座における連携			▶					▶				
5　グローバルパスポートにおける連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
6　SGH 運営指導委員会の開催							▶				▶	
7　海外研修における連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

5(2)　実績の説明（主対象生徒：107 名，準対象生徒 397 名）

5(2)-1　授業における連携

国際クラス第 1 学年を対象とした「総合的な学習の時間：多文化共生」，国際クラス第 2 学年を対象とした「総合的学習の時間：課題探究」に向けて，計 9 回実施。

5(2)-2　研究発表会における連携

国際クラス生徒が実施した計 4 回の研究発表会及び国際クラスと一般進学文系第 2 学年が中心に行った「Meijo Global Festa 2016」に対する助言・講評・運営。

5(2)-3　グローバルサロンにおける連携

全校生徒を対象に自由参加で行う全 7 回の講座のうち，講師として 2 回連携。

5(2)-4　グローバルリーダー講座における連携

全校生徒を対象に行う全 2 回の講座において，講師として連携。

5(2)-5　グローバルパスポートにおける連携

運用状況の共有及び制度の連携方法について協議。

5(2)-6　SGH 運営指導委員会の開催

10 月，2 月に 2 回開催。

5(2)-7　海外研修における連携

海外研修における提携校やフィールドワーク先の紹介，学習内容等に関する助言，引率。

6　研究開発の実績

6(1)　実施日程

業　務　項　目	実　施　日　程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 探究学習に関わる授業	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
2 海外研修							▶		▶			▶
3 ローカルフィールドワーク	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
4 Meijo Global Festa								▶				
5 グローバルパスポート	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
6 グローバルサロン	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→		
7 グローバルリーダー講座			▶					▶				
8 SGH 運営指導委員会等の開催							▶				▶	
9 成果の公表・普及	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
10 事業の評価		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
11 報告書の作成						→	→	→	→	→	→	→
12 他 SGH 指定校との連絡・交流		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

6(2)　実績の説明

6(2)-1　探究学習に関わる授業

国際クラス第 1 学年（33 名）総合的な学習の時間における「多文化共生」（2 単位）
国際クラス第 2 学年（37 名）総合的な学習の時間における「課題探究」（2 単位）
国際クラス第 3 学年（36 名）総合的な学習の時間における「課題探究」（4 単位）
一般進学クラス第 1 学年（284 名）総合的な学習の時間における「探究基礎」（1 単位）
一般進学クラス文系第 2 学年（113 名）総合的な学習の時間における「グローバル概論」（2 単位）

6(2)-2　海外研修

国際クラス第 1 学年：グローバルレクチャー（ニュージーランド）31 名
国際クラス第 2 学年：グローバルフィールドワーク（ニュージーランド）37 名
国際クラス第 2 学年より選抜：グローバルフィールドワーク（台湾）12 名
国際クラス第 3 学年・G サロン参加者より選抜：グローバルアクション（台湾）8 名

6(2)-3　ローカルフィールドワーク

国際クラス第 1 学年：4 回
国際クラス第 2 学年：2 回
国際クラス第 3 学年：50 回（課題研究ゼミによる実施：延べ実施人数 117）
一般進学クラス文系第 2 学年：3 回

6(2)-4　Meijo Global Festa

SGH 指定校生徒がともに議論・発表する場として開催。
11 月 19 日（日）10：00～17：00 実施，参加校 9 校，聴講を含めた実人数 200 名以上。

6(2)-5　グローバルパスポート

SGH の諸活動の記録と活動意欲を喚起する一手法として導入。
「本校事業」,「フィールドワーク・プレゼンテーション」,「学外事業」,「一斉英単語テスト」,「資格試験」の 5 項目の取り組み状況をマイル化して記録。

目標マイルの達成率　国際クラス第 1 学年：27.3%
国際クラス第 2 学年：100%
国際クラス第 3 学年：100%
一般進学クラス文系第 2 学年：0%

6(2)-6　グローバルサロン

全校生徒を対象に自由参加方式で実施。（土曜日 10：00～12：00）
計 7 回実施・参加人数合計 397 名。（国際 200 名，一般進学文系 3 名，その他 194 名）

回	日　時	講　師　・　テ　ー　マ
1	4 月 23 日	大内ひろのしん氏　（株式会社 BLI-PRO） 「やりたいことをやる！」
2	5 月 14 日	金敬黙氏（早稲田大学文化構想学部教授） 「グローバル時代を生きる～地球市民の条件～」
3	6 月 18 日	柳沢究氏（名城大学理工学部建築学科准教授） 「住居と文化～まちづくりを通した伝統の継承～」
4	7 月 9 日	渋谷努氏（中京大学国際教養学部教授） 「多様な社会に向けて～愛知県の多国籍住民の現状から～」
5	10 月 22 日	渋井康弘氏（名城大学経済学部教授） 「異なる文化を知る，知らない人生を知る」
6	11 月 14 日	四方義啓氏（名古屋大学名誉教授） SSH・SGH 合同サロン「インドから西へと流れる学問」
7	1 月 28 日	金成克広氏（AIU 高校生国際交流プログラム事務局長） 甲斐絢氏（AIU 高校生国際交流プログラム企画主任） 「グローバルリーダーへの一歩」

6(2)-7　グローバルリーダー講座

1学期と2学期にそれぞれ1度，全校生徒を対象に実施する。

回	日　時	講　師・テーマ
1	6月22日 （水）	飯島澄男氏（名城大学終身教授） 「科学はみることからはじまる～カーボンナノチューブの発見」
2	11月17日 （木）	佐土井有里氏（名城大学経済学部教授・アジア研究センター長） 「発展する国，停滞する国，その原動力は人～アジアの発展パワーから学ぼう～」

6(2)-8　SGH運営指導委員会等の開催

回	日　時	審議・報告事項
1	10月31日 （木）	・SGH運営指導委員会委員長の選出について ・スーパーグローバルハイスクール中間評価結果について ・国際クラス課題研究発表会について ・ニュージーランド研修について ・名城大学国際フォーラム2016について ・Meijo Global Festa 2016について ・台湾研修について
2	2月27日 （木）	・Meijo Global Festa 2016実施報告 ・台湾研修報告 ・SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL第1回全国フォーラム報告 ・SGH甲子園について ・平成28年度入学生ニュージーランド研修について

6(2)-9　成果の公表・普及

国際クラス第3学年課題研究発表会（日本語）

日　時：平成28年9月14日（水）8：45～15：10
内　容：日本語での研究発表
発　表：国際クラス第3学年36名

国際クラス第3学年課題研究発表会（英語）

日　時：平成28年9月28日（水）8：45～14：10
内　容：英語での研究発表
発　表：国際クラス第3学年36名

Meijo International Forum 2016

日　時：平成28年10月9日（日）9：00～18：00
内　容：名城大学外国語学部による研究発表会にて，ポスター発表
発　表：国際クラス第3学年9名

第2回全国SGH校生徒成果発表会（筑波大学附属坂戸高等学校）

日　時：平成28年11月10日（木）
内　容：SGH指定校生徒による課題研究のポスター発表
発　表：国際クラス第3学年1名

Meijo Global Festa 2016

日　時：平成28年11月19日（土）10：00～17：00
内　容：東海地区SGH指定校・アソシエイト校による議論・発表
口頭発表　　：国際クラス第3学年4件（6名）
ポスター発表：国際クラス第3学年7件（9名）
　　国際クラス第2学年1件（2名）
　　一般進学クラス文系第2学年1件（4名）

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL 第一回全国フォーラム　第3部優良校事例紹介

日　時：平成28年12月26日（月）9：45～16：20
内　容：中間評価を踏まえた取り組み発表
発　表：「探究型学習のPDCAサイクル実践例」

平成 28 年度第 2 回スーパーグローバルハイスクール連絡会

日　時：平成 28 年 12 月 26 日（月）9：45～16：20
内　容：第 2 部指定校報告として分科会の実施
発　表：「生徒の資質変容の定量的評価」

生徒研究発表会

日　時：平成 29 年 2 月 27 日（月）14：00～16：30
内　容：全校より選抜で研究発表
口頭発表：国際クラス第 3 学年 2 件（2 名），
SGH 海外研修報告 1 件（第 2 学年 4 名，第 1 学年 1 名）
ポスター発表：国際クラス第 3 学年 5 件（7 名）
一般進学クラス文系第 2 学年 2 件（8 名）
ニュージーランド研修参加生徒 1 件（5 名）
台湾研修参加生徒 2 件（7 名）

SGH 甲子園

日　時：平成 29 年 3 月 19 日（日）10：00～17：00
内　容：全国 SGH 課題研究発表
発　表：国際クラス第 3 学年 3 名

6(2)-10　事業の評価

生徒の変容を中心に，研究開発目標・実践目標の進捗状況をもって事業を評価。
生徒の変容に関するアンケート：スーパーグローバルテスト
次年度の活動意欲に関するアンケート
スキルとマインドセット等の各因子における向上実感と要因
各因子におけるゴール設定の変更・修正状況

6(2)-11　報告書の作成

SGH 実行委員会及び校務分掌「教育開発部」副部長を中心に，教育開発部員と授業担当者が協力して作成。

6(2)-12　SGH 指定校との連絡・交流

他指定校・アソシエイト校の研究発表会を参観：6 校
他指定校・アソシエイト校との合同学習・研究発表会：5 件
本校主催 Meijo Global Festa 2016 にて，ディスカッション・プレゼンテーション・カンファレンスを開催：22 校参加

7　目標の進捗状況，成果，評価

7(1)【研究開発目標①】グローバルリーダー養成のための各種プログラムを「グローバルパスポート」制度において 25 件以上実施する。

48 件実施することができ，国際クラスは，第 1 学年（33 名）延べ 392 名，第 2 学年（37 名）延べ 345 名，第 3 学年（36 名）延べ 176 名が参加した。

7(2)【研究開発目標②】PBL におけるコンフリクト・レゾリューション，ジグソー学習，フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

昨年度より，校務分掌教務部内にアクティブラーニングに関する研究部会をつくり，活動している。本年度は普通科・総合学科・教育開発部による，教員研修「探究的な学習報告会」を開催した。各クラス・コースの 9 つの実践報告に，49 名が参加し，PBL などの探究的な学習を各コースやクラスに定着させるきっかけとして，取り組みを共有する機会となった。

7(3)【実践目標①】探究型学習を通して，自らネットワークを構築し，協働して問題解決に向かう，スキルとマインドセットを育成する。

国際クラス生徒のスーパーグローバルテスト（5 段階の順序尺度）結果を見ると，本年度は全体的に向上の度合いが低く，第 2 学年では下降した因子も見られた。一方で全ての因子の値は高く，各因子の平均を見ると第 1 学年は 3.9，第 2 学年は 4.1，第 3 学年は 4.1 であった。これは他クラスの結果と比較すると 0.3～0.6 ポイント高い。

また，第 3 学年に「各因子におけるゴール設定の変更・修正」の有無について聞いたところ，86%の生徒が，3 年間の途中で「上方修正した」と答えており，目標が上がることによってスーパーグローバルテストのポイントが下がる傾向にあることが分かった。

以下に国際クラス第 2 学年と第 3 学年のスーパーグローバルテストの結果についての分析を記載する。

【主対象生：国際クラス第 2 学年】

① 11 因子中 8 つの因子の平均が 4.0 を超え，各因子の平均は 4.1 ポイントである。

② 昨年度 1 月の結果と比較して t 検定を行うと，5 つの因子において，有意差が認められた($p<0.05$)が，それらの因子の値は全て下降している。(「論理的・批判的思考力（-0.3)」，「コミュニケーション・コラボレーション力（-0.2)」，「発信力・行動力（-0.5)」，「課題発見力・課題解決力（-0.1)」，「グローバルなキャリア設計の意欲（-0.3)」)

③ 昨年度から値が下降した因子が多かった。昨年度の値が非常に高い（平均 4.2 ポイント）こと，上級生と合同の授業「課題探究」が開始されたこと，海外研修等の校外での活動数が増えたこと等によって，自己評価が下がったことが理由として想定される。

【主対象生：国際クラス第 3 学年】

① 11 因子中 8 つの因子の平均が 4.0 を超え，各因子の平均は 4.1 ポイントである。

② 昨年度 1 月の結果と比較すると各因子が平均 0.1 ポイント上昇している。

③ 昨年度 1 月の結果と比較して t 検定を行うと，「ICT 活用能力（＋0.2)」，「批判・摩擦・失敗への耐性（＋0.3)」の因子で有意差が認められた($p<0.05$)。

④ 昨年度からの変化はあまり有意差が見られなかったが，入学時の結果との変容では平均して 0.7 ポイント上昇しており，「論理的・批判的思考力（＋0.7)」，「ICT 活用能力（＋0.5)」，「課題発見力・課題解決力（＋1.0)」，「多様性の認識と共感（＋0.3)」，「摩擦・批判・失敗耐性（＋0.8)」，「変化への対応（＋0.4)」，「リーダーシップ（＋0.4)」で有為である($p<0.05$)。

7(4)【実践目標②】国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに 4 回以上実施し，それらの実践的活動を通して，ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

国際クラス第 3 学年は，２年時に 5 回，海外フィールドワークは 2 回実施しており，100%の達成できた。しかし，本年度に実施した課題研究活動における個別のフィールドワークを抽出すると，その数は合計で，フィールドワーク先 50 件，フィールドワーク回数 55 回，参加生徒延べ 117 名，4 回以上実施した生徒は 16 名（36 名中）で 44%であった。

第 3 学年の課題研究活動におけるフィールドワークでは，海外研修時に行った調査結果を用いながら，踏み込んだ聞き取り調査を行う姿が見られた。

7(5)【実践目標③】国内外の研修，大会及び社会活動に年間 3 回以上参加させる。

国内外の研修，大会及び社会活動に年間 3 回以上参加した生徒の割合は，国際クラス全体で 80.2%であり，国際クラス第 1 学年及び第 2 学年については 100%達成できた。

第 3 学年の達成率が 41.7%と低いが，その要因の 1 つとして，大会への参加は既に経験しており，本年度は論文執筆が中心的な活動になったため，課題研究発表などを除く大会への参加

を見合わせたことがある。また，研究課題に関わる様々な社会活動やセミナー等の研修に参加している生徒も複数いるが，本年度はそれらを集計できなかった。

7(6)【実践目標④】プレゼンテーションを，国際クラスの生徒は年間 12 回以上実施する。

全学年で達成できた。

特に，本年度の第 1 学年，第 2 学年においては「English Presentation」の授業で体系的にプレゼンテーションの手法を学習させることで，以前より発表活動に慣れた生徒が増えたため，発表そのものの回数を増やすのではなく，発表内容の質を高めるよう指導した。

7(7)【実践目標⑤】卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を国際クラスの生徒は 100%とする。

実用英語技能検定準 1 級，TOEIC Listening & Reading 785 点をもって CEFR の B2 レベルと読み替える。結果として，第 3 学年は実用英語技能検定で見ると 20%，TOEIC で見ると 19%の到達率であった。

しかし，TOEIC Listening & Reading のクラス平均得点の推移を見ると，第 1 学年前期の 313 点から第 3 学年後期の 670 点へと 350 点以上伸びた。

7(8)【実践目標⑥】国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

国際クラス第 3 学年においては，スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校（以下，SGU）である国際教養大学，法政大学，立命館大学総合心理学部・政策科学部，立教大学経営学部，上智大学総合グローバル学部，関西学院大学国際学部への進学が決定している。その他，国際化を推進する大学や課題研究をさらに発展させることのできる大学（同志社大学グローバルコミュニケーション学部，南山大学経営学部，愛知県立大学外国語学部等）や，オーストラリアへの海外進学が決定している。また，その他のクラスでも，東北大学，千葉大学，筑波大学，東京外国語大学，東京工業大学，名古屋大学，京都大学，広島大学等 SGU の国公立大学へ出願している。

在校生においては，第 1 学年では「探究を深めることのできるグローバルな大学」への進学意欲が高い生徒は 84%（「非常に高い（55%）」，「高い（29%）」）と高い値を示している。第 2 学年では，当該大学への進学に意欲を持っている生徒は 81%（「非常に高い（43%）」，「高い（38%）」）であり，経年変化で見ると，昨年度（「平成 27 年度報告書，6 目標の進捗状況・成果・評価と次年度以降の課題（8）【実践目標⑥】」参照）同様，高い値を維持している。

8　次年度以降の課題及び改善点

8(1)　一般進学クラスからの参加生徒数の増加

本年度から一般進学クラス文系第 2 学年を SGH 事業の準対象としているが，グローバルサロンや各種の大会，研修等に参加する等，SGH の諸活動に参加する生徒は少ない。（下表参照）

表　グローバルパスポートの獲得マイル

	人数	平均獲得マイル（通算）	目標マイル達成率	最高獲得マイル（通算）
国際クラス第 1 学年	33	2213.6	27.3%	3200
国際クラス第 2 学年	37	4654.1	100%	7450
国際クラス第 3 学年	36	5356.9	88.9%	7850
一般進学クラス文系第 2 学年	113	665.9	0％	1450

さらに参加者を増やすために，参加数が少ない要因については検証が必要であるが，想定される要因としては，①昨年度までに同様の各種プログラムに参加している，②本校の SGH 諸活

動に参加しなくても各自で活動を行っている，③プログラム内容が当該クラス・学年のニーズに合っていない，④参加する意欲・時間がない，の 4 点が考えられる。

①②はある程度，本校の SGH 事業が定着・発展してきた結果と考える。③についてみると，クラス特性や学年の違いによって，興味関心，学習分野や学習の程度，探究活動の程度も異なるため，今後，学年・クラスのニーズをそれぞれ考慮したプログラムの開発が必要であろう。④においては，意欲喚起のための工夫が必要である。

8(2)　本校が育成したいスキルとマインドセットにおける目指すべきモデル・要素の具体化

探究型学習の成果・効果は認められるが，対象生徒において，スキルとマインドセットの各因子等が意味する具体的な内容について共通理解がなされているわけではない。今後はその点を考慮して，目指すべきモデルと学習内容の具体化を図る。

8(3)　評価手法の研究

実践目標⑤の達成度を測る基準について，次年度以降は CEFR-J の基準を参考にし，生徒の自己評価や教員の評価等も達成度を測る上の参考としたい。本年度は Can Do リストを活用することはできなかったが，次年度は Can Do リストの活用を図る。

また，生徒のスキルとマインドセットの変容を図る手法として，スーパーグローバルテスト等を用いているが，その達成度についても新たな評価手法を検討する。

＜2＞　中間評価を振り返っての今後の課題

本校の中間評価は以下の通りである。

○大学教員の助言を得て作成した SGT により，育成を目指す 5 つのスキルと 5 つのマインドセット（5S5M)の要因を分析し，不足する要因に重点を置いてカリキュラム改善を図っている点が高く評価できる。

○授業における多文化共生や課題探究の取組，グローバルサロン等の授業外での取組，さらに豊富なフィールドワーク等，多くの取組が行われ，質の高い生徒作成物が提出されていることや評価や成果の分析が丁寧に行われている点が評価できる。

○PDCA サイクルを強く意識し，パフォーマンス評価（ルーブリックによる評価），生徒の資質能力の変容に関する評価（質問紙による評価）等，多様な検証方策が効果的に用いられている。SGH のモデルケースとして全国に発信すべき取組であり，更なる発展が期待される。

評価の通り，成果としては，5 つのスキルと 5 つのマインドセットの育成に向けて各種事業を設計して（計画），事業を行い（実行），SGT をはじめとした調査で生徒の変容を測定・検証し（評価），その結果をもって事業内容や構成を修正していく（改善），すなわち PDCA を回していることにある。

今後の課題としては，これまでの PDCA の成果を生かしながら，①準対象生徒の意欲を喚起すること，②5 つのスキルと 5 つのマインドセットにおける目指すモデル・要素を明確化すること，③生徒の変容をきめ細かにとらえるよう評価方法を工夫すること，の 3 点である。

＜3＞　本校について

1　学校の概要

本校は大正 15（1926）年に名古屋高等理工科講習所として開学し，平成 28 年で創立 90 年目を迎えた。

本校では「生徒の夢を育む愛知県下 No.1 の私立高等学校を実現する」という長期ビジョンのもと，「『知・徳・体』の調和した生徒を育成する」という中期ビジョンを掲げ，生徒一人ひとりが知性と教養を身に付け，たくましさと他人を思いやるやさしさを兼ね備えた，心豊かな「名城生」に成長することを目指している。また，「地域に愛され信頼される学校　入学して良かった，卒業して良かったと評価していただける学校」を目指し，生徒と教職員が一丸となって勉学や特別活動に取り組んでいる。

本校は普通科と総合学科それぞれに，生徒の多様な進路に応えるためのクラス・系列を設けており，普通科には国公立大学・難関私立大学を目指す特別進学クラス，名城大学の中核をなす一般進学クラスのほかに，先進的理数教育を目指すスーパーサイエンスクラス，グローバル人材育成を目指す国際クラスを設け，総合学科には，数理・社会探究・地域交流・ビジネスの 4 系列を置いている。

2　教育目的

教育基本法・学校教育法の精神に則り，知・徳・体の調和する人格の完成を目指す。創設以来の伝統に基づき，穏健中正で実行力に富み，国家，社会の信頼に値する人材を育成する。

3　教育方針

「教育目的」を実現するために，　更に次の 6 つの「教育方針」を定める。

1 学習意欲を高める
2 基礎学力を伸ばす
3 しつけ教育を重んじる
4 健全な心身を育む
5 主体的な行動力を養う
6 創造力の根元である生きる力を養成する

4　生徒数とクラス数（平成 28 年度）

<table>
<tr><th colspan="3" rowspan="2"></th><th colspan="3">＜ 生徒数 ＞</th><th colspan="3">＜ クラス数 ＞</th></tr>
<tr><th>1 年</th><th>2 年</th><th>3 年</th><th>1 年</th><th>2 年</th><th>3 年</th></tr>
<tr><td rowspan="5">普通科</td><td colspan="2">特別進学クラス</td><td>105</td><td>136</td><td>96</td><td>3</td><td>4</td><td>3</td></tr>
<tr><td colspan="2">スーパーサイエンスクラス</td><td>31</td><td>37</td><td>41</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td></tr>
<tr><td rowspan="2">一般進学クラス</td><td>理系</td><td rowspan="2">284</td><td>162</td><td>217</td><td rowspan="2">7</td><td>5</td><td>6</td></tr>
<tr><td>文系</td><td>113</td><td>109</td><td>3</td><td>3</td></tr>
<tr><td colspan="2">国際クラス</td><td>33</td><td>37</td><td>36</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td></tr>
<tr><td rowspan="2">総合学科</td><td colspan="2">文系</td><td rowspan="2">143</td><td>110</td><td>113</td><td rowspan="2">4</td><td>3</td><td>3</td></tr>
<tr><td colspan="2">理系</td><td>39</td><td>47</td><td>1</td><td>2</td></tr>
<tr><td colspan="3">計</td><td>596</td><td>635</td><td>659</td><td>16</td><td>18</td><td>19</td></tr>
</table>

※国際クラスは SGH 事業における主対象，一般進学クラス第 1 学年及び一般進学クラス文系第 2 学年は準対象。

<4>　スーパーグローバルハイスクール構想の概要

平成 25 年申請書提出時

<table>
<tr><td>指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="4">めいじょうだいがくふぞくこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">愛知県</td></tr>
<tr><td>26～30</td><td>①学校名</td><td colspan="4">名城大学附属高等学校</td></tr>
<tr><td rowspan="3">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="4">普 通 科　1409 名
総合学科　463 名
合　　計　1872 名</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>429</td><td>145</td><td>24</td><td></td><td>598</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>⑥研究開発構想名</td><td colspan="7">高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究</td></tr>
<tr><td>⑦研究開発の概要</td><td colspan="7">愛知県のビジネス課題を軸に，高大・産学協働の探究活動を行う。PBL の授業と課外活動とを融合させたサービスラーニングによりスキルとマインドセットを育成し，グローバルシチズンシップを獲得させる。評価・検証には，ルーブリック等を用いたパフォーマンス評価，定期的なアンケートによる統計学的手法を用いる。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="1">⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1 全体</td><td>

(1) 目的・目標

地球に生きる一市民として，社会や世界の諸問題を当事者意識をもって捉え，他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材を育成する。そのための体系的な教育課程やプロジェクト型学習（PBL）の教育課程を開発し，校内及び他校に普及する。

以上の目的を踏まえ，研究開発目標として①「グローバルパスポート」制度のプログラム実施，②各教科における PBL の展開例の開発と定着，実践目標として①スキルとマインドセットの育成，②ローカルとグローバルを往還する視座の獲得，③国内外の研修，大会及び社会活動に主体的に参加する生徒の育成，④年間 12 回以上のプレゼンテーションの実施，⑤CEFR の B2 レベル到達率 100%，⑥国際化を進める国内・海外の大学等，課題研究を生かした研究を行える大学へ進学する生徒の育成の計 8 点を設定する。

(2) 現状の分析と研究開発の仮説

対象である国際クラスの生徒については，探究型学習や英語学習で一定の成果を得た。本 SGH 事業においては，従来の取り組みでは十分には育成できなかった「批判・摩擦・失敗を恐れず，変化する状況へ対応する」マインドセットや「コミュニケーションをとりながら協働し問題解決に向かう」スキルを，課題探究の各取り組みの中で育成し，それらを通してグローバルシチズンシップを形成していくことが肝要である。

そのため，本研究開発においては，「世界の現状と課題に触れる経験」，「自らの意見を発表し，他者と対話・議論する経験」，「自ら新たなネットワークを構築する経験」を重視し，「スキルとマインドセットの育成は，グローバルシチズンシップの獲得に有効である」と仮説を立てる。

(3) 成果の普及

他の SGH 指定校に呼びかけ，生徒研究討論会「SGH ミーティング」と生徒研究発表会「SGH フェスタ」とを毎年継続的に開催する。同時にパネルセッションも行い，全国の SGH 指定校に広く発表の場を提供する。この活動は研究成果の発表というだけではなく，生徒，教員を含めた指定校相互の交流，情報交換の場であり，また，SGH の成果を広く情報発信し理解を図る，中核拠点的な意味合いも含んでいる。そのため，名城大学と密接に連携し，産業界にも協力を求めて高大･産学協働で実施し，近隣の中学校，高等学校に向けて「SGH ミーティング」及び「SGH フェスタ」実施を案内し周知を図る。ミーティングまたはフェスタ実施後，発表校による研究集録を作成・配付する。

なお，平成 28 年度以降は優秀発表者を表彰するとともに，本校の海外研修を利用した海外での発表を計画している。

</td></tr>
</table>

	⑧-2 課題研究	**(1) 課題研究内容** 地元産業に根差したグローバル化における諸課題を軸に研究する。ただし，地球市民としての責任感ある姿勢を育むために，経済面のみのアプローチではなく，教科・高大・産学融合型のサポートにより，「人間開発」，「CSV」，「コンフリクト・レゾリューション」，「協働・共生」の観点を学ぶことを特徴とする。研究課題の具体例としては，「愛知県中小企業のグローバル化戦略と課題」，「グローバルな起業モデル」，「外国人労働者との協働・共生モデル」及び「日系企業における多様性の調和とガバナンスのあり方」等があげられる。 **(2) 実施方法・検証評価** 「スーパーサイエンスⅠ」,「多文化共生Ⅰ」,「多文化共生Ⅱ」及び「課題探究」において，研究課題や探究方法の理解，論文作成等を進める。それを補完するものとして，研究課題に関するフィールドワークを国内と海外で関連させて実施し，比較検討する。作成した論文及び課題解決に向けたアクションについては国内及び海外で発表を行う。探究の過程においては，有識者や SGH 指定校生徒とも議論を行い，知識と理解を深める。検証は，生徒の意識及び行動の変容等についてのアンケート，プレゼンテーション，論文のルーブリック評価及びコンテスト等の受賞数によって評価する。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 特になし。
	⑧-3 上記以外	**(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価** 専門的な知識と幅広い教養を身に付け，高度教育への意欲を高めることを目的として，国際クラス第 2 学年を対象にした学校設定科目「国際教養Ⅰ」及び「国際教養Ⅱ」を開設し，名城大学人間学部の講義を受講する。検証評価は，大学生と統一の定期試験結果によって行う。外国人教員による「英会話Ⅰ」，「英会話Ⅱ」，「英会話Ⅲ」を各学年で実施し，発表や討論に取り組む。評価は発表等のパフォーマンス評価と定期試験の成績を合わせて行う。 **(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等** 平成 26 年度実施分については，特になし。 **(3) グローバルリーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の取り組み内容・実施方法** ポートフォリオ「グローバルパスポート」を用いて，グローバルリーダー育成のロードマップの開発及び取り組み促進の材料とする。また，グローバルリーダー育成の検証評価の指針としても用いる。また，大学教員，専門機関職員，多国籍の人々等，多様な立場の人とともに，共通のテーマについて対話を通じて共に学びを深める，サロン的学習の場「グローバルサロン」を実施する。本取り組みは全校を対象として毎月実施する。課題解決に向けた活動として，ボランティア活動やアドボカシー活動等に取り組む。
⑨その他特記事項		主たる対象となる国際クラスは，女子生徒の割合が高く，生徒会執行部等学校全体でリーダーシップを発揮している女子生徒も多い。このことを踏まえて，女性リーダーの育成も念頭に置いている。我が国は先進諸外国と比較して女性リーダーの割合が低いと思われる。SGH 教育によってグローバルな視点を身に付けた女性リーダーの育成を目指す。

＜5＞　実施報告書：研究開発完了報告の詳細

1　研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

2　平成２８年度（第三年次）の研究開発実施計画

SGH 教育の対象を一般進学クラス第 2 学年文系コースに拡大し，校内普及を図る。「総合的な学習の時間」として「グローバル概論」を実施し，海外活動等経験者の講話を含め，探究型学習を行う。

また，夏季休業期間等に他の SGH 指定校や有識者を招いて「Meijo Global Festa」を大学と協働で実施し，研究成果の発表の場とするとともに交流及び普及を図る。なお，「Meijo Global Festa」は，国際クラスの生徒が中心になって企画及び運営をする。さらに，選抜された生徒は海外で実施する「グローバルアクション」にて研究論文を発表する。

評価については，国際クラス第 3 学年では，研究論文の外部評価（大会への参加と表彰等），英語によるサマリーの質，大学進学結果，資格試験の達成度，アンケート調査による自己評価及び研究仮説の検証により行う。一般進学クラス第 2 学年文系コースでは，アンケート調査及び課外の SGH 活動への参加率及び意欲等によって行う。

一期目の卒業生について，SGH 事業指定前の卒業生と進路先等の変容について調査する。

中間審査の指摘事項を踏まえ，事業の改善を行う。あわせて平成 29 年度入学生の教育課程を完成する。

学年	第１学年	第２学年	第３学年
重点事項	海外研修 グローバルサロン	一般進学文系への普及 海外研修 グローバルサロン Meijo Global Festa	課題研究論文作成及び発表 海外研修 グローバルサロン Meijo Global Festa
次年度準備	Meijo Global Festa 海外研修 総合学科希望者への普及	Meijo Global Festa 課題研究論文作成及び発表 海外研修	

3　管理機関の取り組み・支援実績

3（1）　実施日程

業　務　項　目	実　施　日　程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1　授業における連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
2　研究発表会における連携						▶▶	▶	▶			▶	
3　グローバルサロンにおける連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	
4　グローバルリーダー講座における連携			▶					▶				
5　グローバルパスポートにおける連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
6　SGH 運営指導委員会の開催							▶				▶	
7　海外研修における連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

3（2）　実績の説明

3（2）-1　授業における連携

3（2）-1-1　総合的な学習の時間　「多文化共生」（国際クラス第１学年）

講　義　（全１回）

日　時：平成 28 年 6 月 15 日（水）
担　当：名城大学経済学部教授　渋井康弘氏
内　容：緑風の会朗読会「愛知空襲を読む」を聴講
　　愛知の戦争の歴史を知ることで「ものづくり愛知」の成り立ちを学ぶ

3（2）-1-2　総合的な学習の時間　「課題探究」（国際クラス第２学年）

講　義　（全５回）

日　時：平成 28 年 5 月 9 日（月），9 月 26 日（月），9 月 30 日（金），
　　11 月 14 日（月），11 月 18 日（金）
担　当：名城大学経済学部教授　渋井康弘氏
内　容：講義 1「愛知空襲と愛知の産業構造」
　　講義 2「分業とグローバリゼーション①②」」
　　講義 3「技術と文化は時空を超える①②」

講　義・討　議（全２回）

日　時：平成 28 年 6 月 3 日（金），6 月 17 日（金）
担　当：名城大学経営学部教授　田中武憲氏
内　容：講義 1「日本と台湾の経済関係」
　　講義 2・討議「深まる日本＝台湾関係」
　　討議参加：名城大学台湾人留学生　FU YAO HUI 氏，YANG PO WEI 氏

フィールドワーク

日　時：平成 28 年 6 月 6 日（月）
担　当：名城大学経済学部教授　渋井康弘氏
　　名城大学経済学部特任助手　大前智史氏
内　容：戦跡フィールドワーク「歴史と大きさを歩いて知る名古屋市内の戦跡」

3（2）-2 研究発表会における連携

国際クラス第３学年課題研究発表会（日本語）

日　時　：平成 28 年 9 月 14 日（水）
連携内容：大学教員の聴講・講評
　　名城大学外国語学部より３名

国際クラス第３学年課題研究発表会（英語）

日　時　：平成 28 年 9 月 28 日（水）
連携内容：大学教員の聴講・講評
　　名城大学外国語学部長　Ananda Kumara 氏をはじめ，外国語学部より６名

Meijo International Forum 2016

日　時　：平成 28 年 10 月 9 日（日）
連携内容：研究発表会の開催
　　外国語学部学生及び国際クラス生徒（9 名）によるポスターセッションの実施
担当・調整：名城大学外国語学部長　Ananda Kumara 氏

Meijo Global Festa　2016

日　時　：平成 28 年 11 月 19 日（土）　10：00～17：00
連携内容：大学施設利用（ナゴヤドーム前キャンパス）
　　大学教職員によるコーディネート及び講演・講評
　　大学渉外部による広報
・分科会講師　分科会 A　名城大学経済学部教授　渋井康弘氏
　　分科会 B　名城大学経営学部教授　村松恵子氏
　　分科会 C　名城大学外国語学部教授　津村文彦氏
　　分科会 D　名城大学都市情報学部教授　亀井栄治氏・准教授　鈴木淳生氏
・来賓挨拶・講評等
　　名城大学長　吉久光一氏
　　名城大学外国語学部長　Ananda Kumara 氏

生徒研究発表会

日　時　：平成 29 年 2 月 27 日（月）
連携内容：大学教員等の聴講・講評
　　運営指導委員，名城大学外国語学部長　Ananda Kumara 氏をはじめ 20 名
　　大学渉外部による広報

3（2）-3 グローバルサロン（以下，G サロン）における連携

第３回 G サロン

日　時　：平成 28 年 6 月 18 日（土）
連携内容：講師派遣
講　師　：名城大学理工学部教授　柳沢究氏「住居と文化～まちづくりを通した伝統の継承」

第５回 G サロン

日　時　：平成 28 年 10 月 22 日（土）
連携内容：講師派遣
講　師　：名城大学経済学部教授　渋井康弘氏　・　留学生２名
　　「異なる文化を知る，知らない人生を知る」

3（2）-4 グローバルリーダー講座における連携

第１回グローバルリーダー講座

日　時　：平成 28 年 6 月 22 日（水）
連携内容：講師派遣
講　師　：名城大学終身教授　飯島澄男氏
「科学はみることからはじまる～カーボンナノチューブの発見」

第２回グローバルリーダー講座

日　時　：平成 28 年 11 月 17 日（木）
連携内容：講師派遣
講　師　：名城大学経済学部教授・アジア研究センター長　佐土井有里氏
「発展する国，停滞する国，その原動力は人～アジアの発展パワーから学ぼう～」

3（2）-5 グローバルパスポートにおける連携

連携内容：運用状況の共有及び制度の連携方法についての協議

3（2）-6 SGH 運営指導委員会の開催

第５回 SGH 運営指導委員会

日　時：平成 28 年 10 月 31 日（木）16：00～17：00
場　所：名城大学附属高等学校 1 号館　会議室
出席者：影戸誠委員長，黒沢浩委員，武村學委員
陪席者：岩崎，鈴木，羽石（以上，名城大学附属高等学校）楯（以上，管理機関）
配布資料：第 4 回 SGH 運営指導委員会議事要旨（案）（平成 28 年 2 月 25 日開催分）
資料 1　文部科学省所管の教育研究歴，10 月 13 日讀賣新聞記事
資料 2　国際クラス課題研究発表会　9 月 28 日開催
資料 3　ニュージーランド研修報告
資料 4　名城大学国際フォーラム 2016 概要
資料 5　Meijo Global Festa 2016 について
資料 6　台湾研修行程表

【審議事項】
・SGH 運営指導委員会委員長の選任について

【報告事項】
・スーパーグローバルハイスクール中間評価結果について
・国際クラス課題研究発表会について
・ニュージーランド研修について
・名城大学国際フォーラム 2016 概要
・Meijo Global Festa 2016 について
・台湾研修について

第６回 SGH 運営指導委員会

日　時：平成 29 年 2 月 27 日（月）15 時 00 分～16 時 00 分
場　所：名城大学附属高等学校 1 号館　会議室
出席者：武村學委員
陪　席：岩崎，鈴木，羽石（以上，名城大学附属高等学校）楯（以上，管理機関）

配布資料：第 5 回 SGH 運営指導委員会議事要旨（案）（平成 28 年 10 月 31 日開催分）

資料 1　Meijo Global Festa 2016 実施要領等

資料 2　台湾研修報告書

資料 3　SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL 第 1 回全国フォーラム報告

資料 4　SGH 甲子園について

資料 5　ニュージーランド研修行程表

【報告事項】

・Meijo Global Festa 2016 実施報告

・台湾研修報告

・SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL 第 1 回全国フォーラム報告

・SGH 甲子園参加生徒等について

・平成 28 年入学生ニュージーランド研修

3（2）-7　海外研修における連携

日　時　：平成 28 年 12 月 12 日（月）～12 月 19 日（月）

連携内容：台湾研修連携先の紹介（名城大学経営学部教授　田中武憲氏）

・台中科技大学

・慧國工業股份有限公司（アイシン精機現地企業）

・旭硝子顯示玻璃股份有限公司（旭硝子現地企業）

研修内容等に関する助言・支援・引率（名城大学経営学部教授　田中武憲氏）

4　研究開発の実績

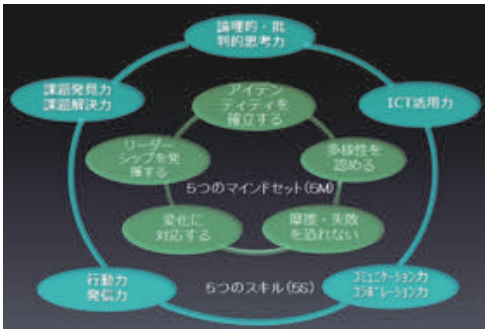
本校では「スキルとマインドセットの育成は，グローバルシチズンシップの獲得に有効である」との仮説をもとに研究開発を実施している。

そのため，本章・次章においては，5 つスキルと 5 つマインドセット（以下，5S5M）を中心に，各因子における達成度や意欲等のデータを用いて成果や課題を記載した。

5S5M の各因子は以下の通りである。

5 つのスキル（5S）

① 論理的・批判的思考力（思考力）
② ICT 活用能力（ICT）
③ コミュニケーション力･コラボレーション力（コミュ･コラボ）
④ 行動力・発信力（発信・行動）
⑤ 課題発見力・課題解決力（発見・解決）



5 つのマインドセット（5M）

① アイデンティティを確立する（ID）
② 多様性を認め共感する気持ち（多様性）
③ 批判・摩擦・失敗を恐れない（失敗耐性）
④ 変化に対応する（変化への対応）
⑤ リーダーシップを発揮する（リーダーシップ）

なお，以下の図表において各因子の名称は，カッコ内のように省略して表記した。

4（1）　実施日程

業　務　項　目	実　施　日　程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 探究学習に関わる授業	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
2 海外研修							▶		▶			▶
3 ローカルフィールドワーク	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
4 Meijo Global Festa								▶				
5 グローバルパスポート	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
6 グローバルサロン	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→		
7 グローバルリーダー講座			▶					▶				
8 SGH 運営指導委員会等の開催							▶				▶	
9 成果の公表・普及	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
10 事業の評価		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
11 報告書の作成		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
12 他 SGH 指定校との連絡・交流		→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

4（2） 実績の説明

4（2）-1 探究学習に関わる授業

探究学習に関わる授業に共通することとして，作成されたレポートやプレゼンテーションは，ルーブリックを使用して評価する。本年度は生徒による自己評価や相互評価も一部取り入れた。各授業の目指す目的によって適宜変更して使用しているが，基本的なルーブリックを以下に記載する。

レポート・課題研究論文評価におけるルーブリック				
	4	3	2	1
論理展開	客観性のあるデータに基づいて論理展開を明確にできている。内容は正確で間違いがない。	大方は客観性のあるデータに基づいて展開している。内容はほぼ正確であるが不正確なものも含まれる。	内容は大部分が正確であるが，客観性のないデータを利用しており，論理展開に矛盾が見られる。	データがなく論理展開が矛盾している。大切な情報が不足し，内容は間違ったものや不正確なものが含まれる。
文章表現	誤字・脱字がなく，適切な表現が使われている。文のつながりも明瞭で読みやすく，展開をスムーズに理解できる。	誤字・脱字はほとんどなく，適切な表現が使われている。文のつながりはある程度スムーズに理解でき読みやすい。	誤字・脱字がある。適切な表現が使われているが，文のつながりが不明瞭な箇所がある。	誤字・脱字が多く，表現が不適切な箇所がある。文のつながりも不明瞭で読みにくい。
書式・レイアウト	規定の書式設定に全て当てはまり，目次・脚注・出典・図表の整理も適切に行われている。	大方は規定の書式設定に当てはまる。目次・脚注・出典・図表の整理は，一部適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる部分が目立つ。目次・脚注・出典・図表の整理は，適切でない部分がある。	規定の書式設定と異なる。目次・脚注・出典・図表も整理されていない。
先行研究・調査・分析	5 つ以上先行研究を分析しており，そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析も適切である。	3 つ以上先行研究を分析しており，そのうえで足を使った調査をしている。調査の手続き・分析は一部不明瞭な点もある。	1 つ以上先行研究を分析し，調査している。調査の手続き・分析は不明瞭な点もある。	文献による先行研究の分析がされておらず，調査も実施していない。

プレゼンテーションにおけるルーブリック				
	4	3	2	1
内容の適切さ	十分に調べられており，必要な情報は全て含まれている。結論が明瞭で，内容はテーマと齟齬がない。	調べた成果が見られ，一部不正確な情報があるものの必要な情報が大方含まれている。内容は大半がテーマに沿っている。	調べたことはわかるが，間違った情報が含まれ，情報が不足している。内容はテーマの主要な部分が一部抜けている。	調べが不十分であり，間違った情報が含まれ，重要な情報が不足している。内容はテーマに沿っていない。
構成の論理性	情報は正しく分類され論理的に並べられている。 展開がわかりやすく，スムーズに理解できる。	大部分の情報は正しく分類され論理的に並べられている。 関連が不明確な情報も複数含まれる。	いくつかの情報は論理的に並べられているが，分類が適切ではない。 関連が不明確な情報が半分程度見られる。	情報の並べ方に論理性が不足している。情報の分類がなされていない。
記述の明確さと読みやすさ	文字の色，大きさは適切で読みやすい。 内容がわかりやすくなるよう明確にレイアウトされている。	文字の色，大きさはほぼ読みやすい。 内容に沿って明確にレイアウトされている。	文字の色，大きさはやや読みにくいところが目立つ。 内容に沿ってレイアウトしようとする工夫は認められる。	文字の色，大きさが不適切で読みにくい。 内容に対してレイアウトが不明確である。
絵や図の使い方	全ての絵や図は，効果的に示され，テーマや内容を引き立たせている。図表の出典等も正しく入っている。	大方の絵や図は，効果的に示され，テーマや内容に沿っている。図表の出典等に一部揺れ・抜けがある。	絵や図は使われているが，テーマや内容とは関連性が弱いものが含まれる。図表の出典等に揺れ・抜けがある。	絵や図が効果的に使われていない。発表の内容との関連性も弱い。図表の出典等は入れられていない。
発表の姿勢	姿勢よく，堂々と発表している。聴衆に視線をむけ，自分の言葉で発表しており，身振り等も適切である。 発表全体を通じて，十分な音量がある。	姿勢よく，聴衆に視線をむけている。一部自分の言葉で伝えていないが，身振り等の工夫もみられる。 発表時間の大方は十分な音量がある。	姿勢に気が回らず，発表時間の半分程度は，聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼りがちで自分の言葉で伝えていない。 発表時間の半分程は，十分な音量がある。	姿勢が悪い。あるいは，発表中の聴衆に視線を向けていない。スクリプトに頼っている。音量が小さく，聴衆が聞き取りづらい。

4（2）-1-1 総合的な学習の時間：多文化共生（2 単位）

対　象：　国際クラス第 1 学年（33 名）

目　的：　課題探究に向かう入門科目と位置付け，思考や探究の「型」とともに問題解決に向かう道筋を意識させる。また，PBL の実施により，コミュニケーション力やコラボレーション力の育成を図る。海外経験を積む前に議論やプレゼンテーションを経験することで，自信や自己効力感を養うことができ，海外へ展開する上での推進力となる。

内　容：　ワークショップやフィールドワークを織り交ぜながら，探究活動の基礎となる思考・知識・技術について習得させる。特に，各課題における問題の背景や構造等を多面的に理解することや多様性への認識と共感を育むことに留意して実施した。

アカデミックスキルズ	(1)　アイデア・思考の出し方：ブレインストーミング (2)　アイデア・思考の整理の仕方：マインドマップ (3)　情報のまとめ方：レジュメ作成，新聞切り抜き（NIE） (4)　発表の仕方・プレゼンテーションの構成の考え方 (5)　ディスカッション・ディベート (6)　協調学習：ジクソー学習
多文化共生 プログラム	(1)　マインドマップによる自己理解と他者インタビュー (2)　他者紹介記事「この人」作成 (3)　多文化理解ワークショップ 「異文化理解」,「豊かさランキング」,「貿易ゲーム」 「対立・問題の解消」,「難民・移民の受け入れ問題」,「バーンガ」 (4)　ジグソー学習 「工業を中心としたドイツと日本」 「トヨタ自動車から見る地元の産業構造」 「アメリカにおける産業構造」 (5)　プレゼンテーション
フィールドワーク	(1)　名城大学　戦争体験朗読会 (2)　トヨタ自動車工場（アメリカ・ヒルトップ高校との協働学習） (3)　名古屋モスク (4)　JICA 中部
ニュージーランド研修 プログラム	(1)　ニュージーランド地域研究 (2)　日本文化研究 (3)　レジュメ作成・プレゼンテーション（日本語・英語） (4)　現地聞き取り調査 (5)　調査レポート作成・プレゼンテーション

成　果：　1 月に実施した「5S5M 等の各因子における向上実感」について尋ねるアンケート調査から，本授業の目的にある「コミュニケーション・コラボレーション力」と，授業内で留意していた「多様性に対する理解と共感」,「今後の探究意欲」の項目を抽出した。

結果，生徒が向上実感を「強く感じる」もしくは「感じる」と回答した割合は,「コミュニケーション・コラボレーション力」は 74%,「多様性に対する理解と共感」は 54%,「今後の探究意欲」は 90%であった。（図 1）。

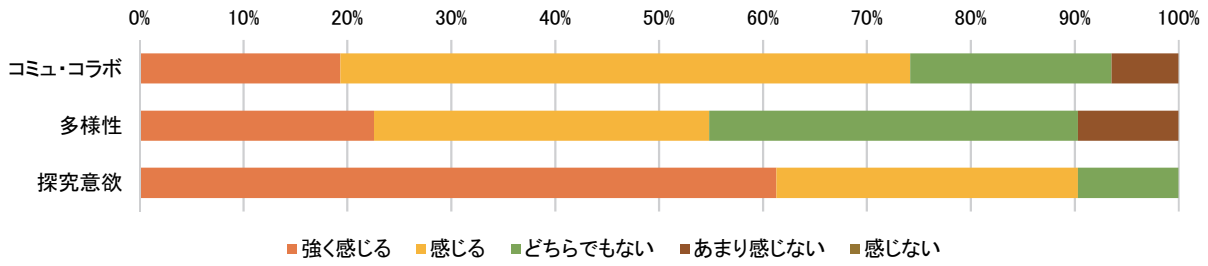


図 1　スキルとマインドセットに関する向上実感（国際クラス第 1 学年）

また，図 1 において「強く感じる」もしくは「感じる」と答えた生徒に，その回答を導くことになった要素を複数選択で聞いた。

要素群は以下の 10 項目である。

1　探究型学習を行う授業の経験や成果（アクティブラーニング型）
2　海外研修の経験や成果
3　フィールドワークの活動経験や成果
4　サロンや授業等での外部講師との交流経験
5　知識伝達型授業の経験や成果（教授型）
6　英語力の向上
7　学外での研修や大会等への参加経験
8　他指定校生徒との交流や協働学習の経験
9　先輩からの助言
10　部活動の経験・その他の経験

要素 1～3（「探究型学習を行う授業の経験や成果」,「海外研修の経験や成果」,「フィールドワークの活動経験や成果」）は，「探究型学習」と考えられる。図 2 において見ると，区分線より左側は「探究型学習」が向上実感に影響を与えており，どの項目においてもおよそ 50%程度影響したといえる。

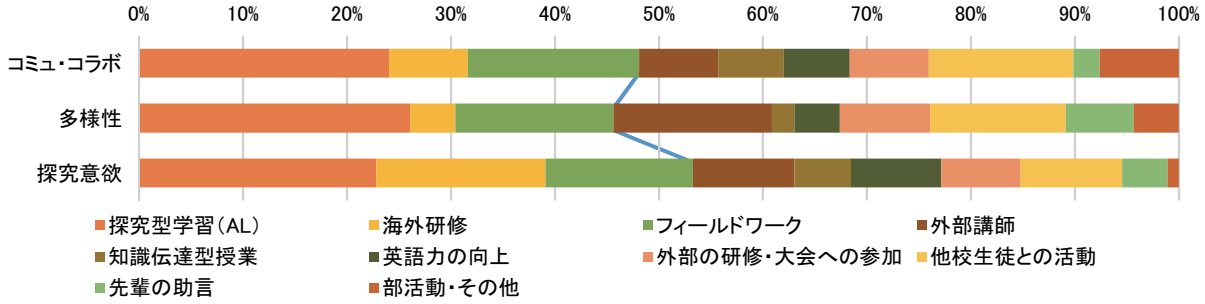


図 2　向上実感に影響したと考える要素

課　題：　次年度に向けた課題としては，「論理的・批判的思考力」と「多様性の認識と共感」の育成に注力し，探究活動の基礎となる幅広い知識と姿勢を定着させることである。同時に，どの教員でも担当できるよう，授業内容の精選と記録化を進め，シラバスを整備することが必要である。

4（2）-1-2 総合的な学習の時間：課題探究（2 単位）

対　象：　国際クラス第 2 学年（37 名）

目　的：　広く問題意識を持ちながら課題について理解を深め，当事者意識を持って探究活動を行うことを目的とする。また，議論を通して，他者との摩擦に対する耐性及びリーダーシップを育み，調査や有識者からの講義を通して，論理的思考力を育むことを目指す。

内　容：　「多文化共生」の上位科目として個人研究活動の導入を行うとともに，国内外のフィールドワークを支える科目とする。第 3 学年と合同ゼミの形式をとっているが，研究課題についての理解を深めるため，適宜第 3 学年とは別の講義やワークショップを行う。

ニュージーランド 研修プログラム	（1）ニュージーランド地域研究 （2）現地講義受講 （3）ポスター作成　選抜生徒が Meijo Global Festa においてポスター発表
南山大学 連携講座	南山大学人類学博物館（黒沢浩教授）による連携授業を実施（計 7 回） 論理的思考力の育成：博物館資料から情報を読み解く
課題研究導入	（1）課題研究のガイドライン 論文『愛知県の工業集積』（渋井康弘氏）から，論文と作文の違いを学ぶ （2）第 3 学年が実施している課題研究テーマについてレポートを作成（5 テーマ） （3）テーマの検証：良い主題・悪い主題 （4）リサーチトピック作成
研究者講義	（1）名城大学経営学部　田中武憲教授　「日本と台湾の経済関係」 「深まる日本＝台湾関係」 （2）名城大学経済学部　渋井康弘教授　「愛知空襲と愛知の産業構造」 「分業とグローバリゼーション①②」 「技術と文化は時空を超える①②」 「戦跡フィールドワーク」 （前述の「3(2)-1-2 総合的な学習の時間「課題探究」（国際クラス第 2 学年）」参照） （3）JICA 中部　「中小企業の支援・研修員制度」

成　果：　成果としては，①本授業の目的にもある，論理的・批判的思考力，摩擦・失敗耐性，リーダーシップ力を高めたこと，②第 3 学年との協働学習によって，早い段階でテーマについての知識を習得できたこと，があげられる。

①については，1 月に実施した「5S5M 等の各因子における向上実感」について尋ねたアンケート調査（前述「4(2)-1-1　総合的な学習の時間：多文化共生（2 単位）」参照）を用いて，①の 3 つの項目について分析を行った。

結果として，「論理的・批判的思考力」，「批判・摩擦・失敗を恐れない」，「リーダーシップ」の各因子の向上実感において，「強く感じる」もしくは「感じる」と答えた生徒はそれぞれ 76%，59%，62%であった（図 1）。

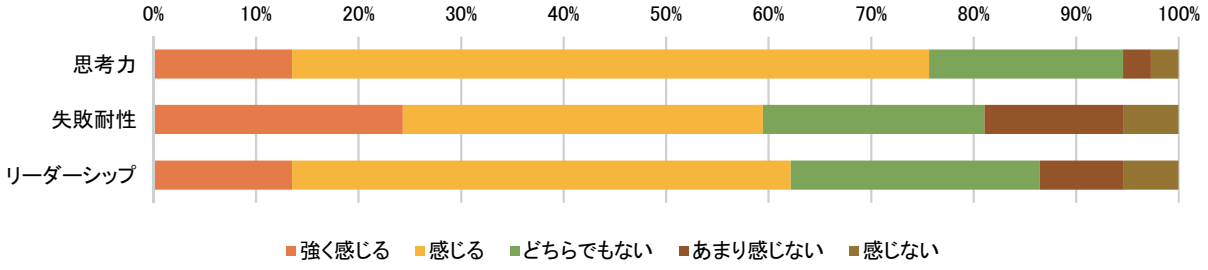


図 1　スキルとマインドセットに関する向上実感（国際クラス第 2 学年）

また，その回答を導くことになった要素を尋ねたところ，どの因子においても「探究型学習」と答えた生徒が最も多かった（図 2）。さらに，「フィールドワーク」や「海外研修」，「外部講師による授業」も，「課題探究」の授業と密接に関連する活動であるため，それらの要素も含めると，約 6 割～7 割近くまでが「課題探究」に関わる要素が影響していたといえる。

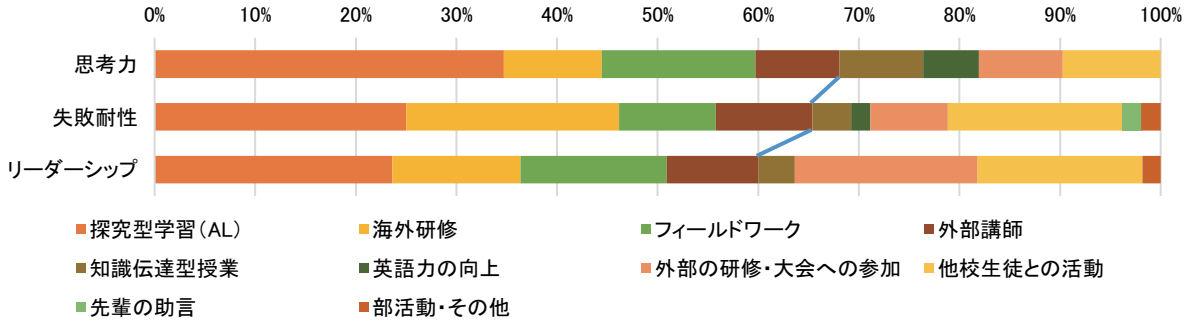


図 2　向上実感に影響したと考える要素

②の成果の根拠としては，課題研究に関するフィールドワークや研修に参加する第 2 学年の生徒が増えたことがあげられる。本年度の参加人数は 25 名（37 名中）であり，昨年度の第 2 学年の人数 19 名（38 名中）よりも約 15%増えている。すなわち，早い段階で課題探究に関する活動に取り組んでいることが見て取れる。

課　題：　第 3 学年の生徒が研究課題にしている内容についての知識は深まったが，多面的・複眼的な思考や知識は不足している。また，上級生の意見を妄信する生徒もおり，偏った見方になっている様子や批判的思考力が向上しない様子も見受けられた。

そのため，適宜面談を行いながら授業内容を工夫し，各自の問題意識につながるテーマを設定するよう，さらに上級生の課題研究の発展的な内容になるよう助言した。

また，課題に対して当事者としての意識・理解が欠けている生徒の様子も伺えた。課題研究活動においては，本校の掲げる「問題発見・解決能力」等のスキルと「多様性の認識と共感」等のマインドセット，双方の育成が必要不可欠である。今後 PDCA サイクルにのせて一層の工夫・改善が必要である。

また，次年度はより早い課題研究論文の完成を目指すため，早くから各自が広い視野を持ち，課題を探究できるような素養を身につけさせることが必要である。そのため，本年度第 2 学年で実施したプログラムの多くを，次年度は第 1 学年で実施する計画である。

4（2）-1-3 総合的な学習の時間：課題探究（4 単位）

対　象：　国際クラス第 3 学年（36 名）

目　的：　課題研究論文を作成し，その社会課題の解決に向かって周囲に働きかけながら仲間を増やし，解決に向けたアクションを模索することを目的とする。その結果，論理力や表現力が鍛えられるとともに，問題解決能力の伸長が見込まれる。

内　容：　先行研究の分析とフィールドワークを通した調査を行い，自らが設定した研究課題において研究を進める。

研究成果は 10,000 字程度の研究論文として執筆し，本校主催の Meijo Global Festa や生徒研究発表会等で発表する。併せて，国内外の各種大会への参加を促し，発信力を養成する。

ガイダンス	作文と論文の違いを知る
リサーチトピックの設定	（1）問題意識・問題の焦点を設定する （2）問題の背景（先行研究を踏まえる）を考える （3）調査の重要性を知る （4）分析の方法を学ぶ・なぜその方法で分析するのかを検討する
先行研究分析	（1）図書館を使いこなす （2）情報検索ツールを使う
アウトラインの設定	研究の手順，方向を描く
調査手法の検討	調査の手法・分析方法を検討する
課題研究論文執筆 スライド作成	（1）10,000 字程度の論文を作成する （2）表紙・目次・引用等の書式を整えて提出する （3）英語によるレジュメ・スライド・ポスターを作成する
課題研究発表会	（1）日本語・・・平成 28 年 9 月 14 日（水） （2）英語・・・・平成 28 年 9 月 28 日（水）

成　果：　成果としては，①新たにゼミ形式の授業を採り入れたこと，②一定の成果物が作成されたこと，③フィールドワーク回数が増えたこと，④校外において研究発表を行う生徒が増えたこと（SGH 甲子園，SGH 校生徒成果発表会，台湾研修等），⑤一連の課題研究が生徒たちの能力とともに意欲やキャリア形成にも良い影響を与えていること，が挙げられる。

①については，本年度からゼミ形式を試行し，さらに 4 単位中 2 単位を国際クラス第 2 学年と合同で実施することにより，研究の継続性を担保した。

②については，全員が調査をもとに個人研究を行い，課題研究論文を執筆，英語でのレジュメ，スライド，ポスターを作成し，日本語と英語でそれぞれ発表することができた。昨年度からの変更は，レジュメを全て英語で表記するようになったこととスライドは英語でのみ作成したことである。母語を使った論理的思考力の必要性は認めながらも，日本語で作成したものを単純に英語に翻訳するという作業を省き，英語で考えて構成するよう指導した。

③は，例年よりも早くテーマや課題を明確にするよう指導したことで，早くからフィールドワークに赴くことができた。（後述の「4(2)-3 ローカルフィールドワーク」を参照）

④では，大学等が主催する研究発表会等に参加する生徒が増加し，3 月 19 日（日）に開催される関西学院大学・大阪大学・大阪教育大学主催の「SGH 甲子園」には 3 名が出場した。（後述の「5(5)【実践目標③】」を参照）

⑤については，3 年間の課題研究活動を通して「今後の探究意欲」と「グローバルなキャリア設計に対する意欲」について，「とても高い」から「高くない」まで 5 段階の順序尺度で尋ねた。その結果は両項目とも意欲が高い生徒の割合が顕著であった（図 1）。

また，それぞれの項目の加重平均値を算出すると，両項目とも 4.7 であり，非常に高いことが分かった。

※加重平均＝（5×［5 を選択した生徒数］＋4×［4 を選択した生徒数］…1×［1 を選択した生徒数］）÷データ数）とし，全員が最も高い評価をした場合は 5，最も低い評価をした場合は 1 となる。

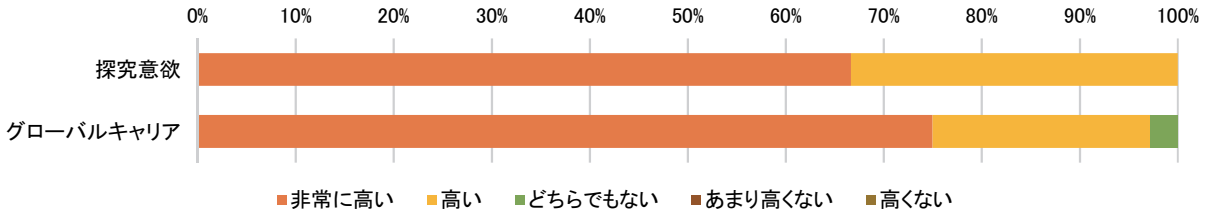


図 1　スキルとマインドセットに関する向上実感（国際クラス第 3 学年）

また，その回答を導くことになった要素を尋ねた。要素 1～3（「探究型学習」，「海外研修」，「フィールドワーク」）は，「探究型学習」と考えられるため，区分線より左側は「探究型学習」が向上実感に影響したといえる（図 2）。

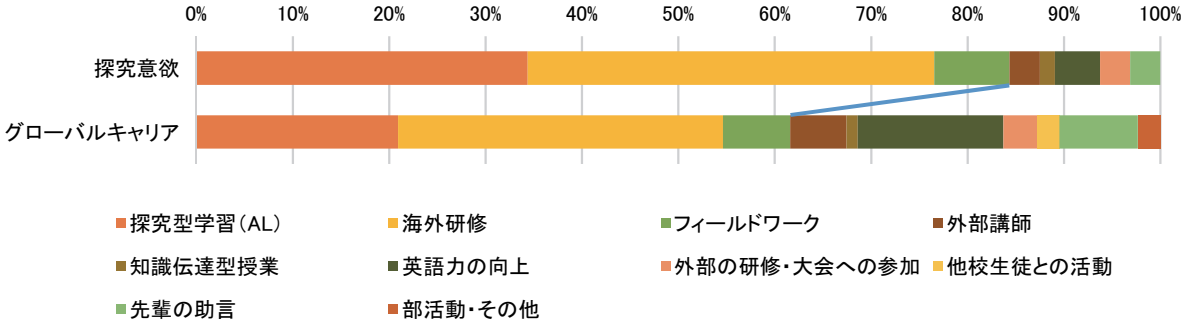


図 2　向上実感に影響したと考える要素

この結果を見ると，課題研究活動によって，「探究活動」と「グローバルなキャリア設計」のどちらについても，非常に高い意欲を持った生徒が育成されたといえる。

課　題：　今後の課題としては，①複式授業で実施するゼミをより効果的に運営し，上級生と下級生の協働学習をより発展させること，②生徒一人ひとりの研究活動を深められるよう，効果的な指導内容・手順を策定すること，③どの教員でも担当できる形にシラバスを整備することが挙げられる。

また，課題研究活動は論文を作成することがゴールではなく，課題に向かって周囲に働き掛けながら解決に向けた行動を模索できるようになることである。そのためには，発信とフィードバックから研究を深化させること，研究成果の校内外への普及の 2 点が不可欠である。

そのため，本年度は第 3 学年の 9 月に論文の大枠を完成させたが，今後は第 2 学年の 12 月に完成するようカリキュラムを改善し，発表の機会を増やす。ただし，次年度の第 3 学年は移行期間とし，第 3 学年の 7 月の完成を目標とする。

4（2）-1-4 総合的な学習の時間：探究基礎（1 単位）

対　象：　一般進学クラス　第 1 学年（284 名）

目　的：　探究型学習のエッセンスを広く普及する科目である。探究の基礎を支える，話す・聞く・書く・読む等のベーススキルを，新聞等を利用して学ぶ。生涯にわたって学び続けるために，主体的な行動力とメディアリテラシーを身につけて，自らの将来を考える力を育むことを目指す。その結果，論理的思考力やコミュニケーション力をつけるとともに，多様な価値観を知ることが期待される。

内　容：　8 クラスを 2 分割し，4 クラスずつ合同で以下の内容を実施した。

アカデミックスキルズ	学習内容
考える・書く	マインドマップの作成 マインドマップを使った自己紹介
話す・聞く	他者紹介文の作成 マインドマップを利用した「この人」（インタビュー記事）制作
情報を集める	新聞から考える：興味に沿って記事を集め，ワークシート作成，発表
情報を深める	新聞から考える：集めた記事の中から研究テーマを選ぶ
まとめる・整理する	新聞から考える：新聞切り抜き作品作成（2回）
発表する	新聞から考える：まとめた内容のプレゼンテーション
将来を考える 1	職業について考える：新聞記事利用し，ワークシート作成，発表
将来を考える 2	講演「キャリアと私Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ　～　働く上で大切なこと.」
将来を考える 3	自分史作成：過去の自分から将来への自分を想像し可視化していく

成　果：　評価は，ワークシート，インタビュー記事，新聞切り抜き作品をもとにルーブリック等で行った。新聞切り抜き作品は，各自が 9 月と 1 月の計 2 回作成したが，それらの作品の内容・完成度の比較したところ，9 月は，個人的興味・関心に基づくテーマの作品が多く，社会的な問題について探究するというよりは，興味・関心のある出来事を列挙したものが目立った。しかし，1 月の作品では，「高齢化」「医療問題」等，社会的な問題について探究したものが増加した。新聞記事を利用し，問題に対するメリット，デメリット，その問題から派生する事柄について自己の考えを表現することができた。

Ａさん（9月作成作品事例）

Ａさん（1月作成作品事例）

結果として，中日新聞主催「新聞切り抜き作品コンクール」へ 273 作品を応募することができ，うち 1 名の「トランプ氏が与える影響」についての作品が佳作となった（9816 点中）。年間に 2 回，切り抜き作品を作成することによって，インターネット上で自分の興味・関心がある事柄を閲覧するだけでなく，社会で広く問題とされていることについて学ぶことができた。また，その事柄に対しどのような考え方を持った人たちがいるか等を知る機会となり，メディアリテラシーに対する意識付けができたと考える。

課　題：　新聞切り抜き作品・プレゼンテーションの評価については，ルーブリックを利用した相互評価であったが，他者の作品を評価する上で客観的な評価が十分できていない。今後，ルーブリックを使った評価について，その意義等を十分に説明する必要があると考える。

また，1 単位の授業では，本授業の目的にある「探究型学習のエッセンスを広く普及する」という段階に到達させるのは難しい。他の教科と連携しながら，探究の基礎を支える，話す・聞く・書く・読む等のベーススキルを高めていくことが必要である。また，キャリア意識を育むためには，本年度以上にホームルーム活動との連携が必要であろう。

4（2）-1-5 総合的な学習の時間：グローバル概論（2 単位）

対　象：　一般進学クラス文系　第 2 学年（113 名）

目　的：　幅広い教養の修得と課題探究力，プレゼンテーション力，コミュニケーション力の向上を目的とする。現実に起こっている世界的な諸課題を有識者から直接聞くことで，当事者意識や主体性を高める。一般進学クラス文系（以下，一般進学クラス）の生徒を対象に実施することで，SGH の取組みを校内に普及させる。

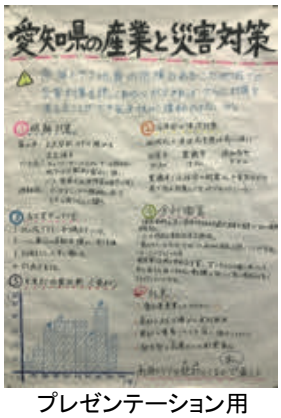
内　容：　主に次の 3 点を中心に探究活動を実施した。①本校の研究課題である「愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題」について探究活動を行い，ポスターにまとめてプレゼンテーションを行う。②社会見学を実施し，事前調査と現地調査に基づいてレポートを作成する。③研究者や専門家等から講義を受け，グローバル課題について学ぶ。

以下に③にあたる内容を記す。

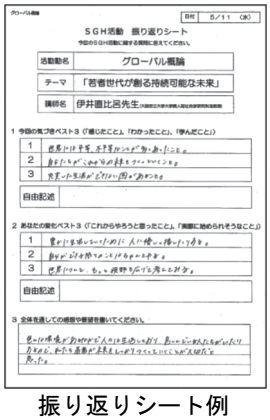
外部講師　一覧	
峯岸 努氏 東京大学教育学部附属中等教育学校	―包括的に見て，具体的に考える―
伊井 直比古氏 大阪府立大学大学院人間社会学研究科	若者世代が創る持続可能な未来
志賀 幸弘氏 幸田町企画部 企業立地課	あるべき未来を予測 未来を開拓し創造する
渡辺 麻由氏 株式会社ウィルゲート	自身を見つめ，近い未来を先取りすることで見えるこれからの自分！

成　果：　①については，4 月はグループ内で発言することすら躊躇していた生徒が 10 月にはグループが一丸となって円滑なプレゼンテーションが出来るようになった。

また，研究課題の範疇で探究テーマを設定することに苦心していたが，試行錯誤を繰り返しながらテーマを決め，協働学習を実施することができた。また，その成果をポスターにまとめて，プレゼンテーションを行った。



プレゼンテーション用ポスター例



振り返りシート例

ここまでの生徒の変容を観察していると，本校が目指す 5S5M の育成に効果があったと考えられる。それを裏付けるものとして，スーパーグローバルテスト（以下，「SGT」とす

る。後述の「4(2)-10　事業の評価」を参照）を 4 月と 1 月に実施したところ，本授業で目的とするスキル「問題発見・問題解決能力」，「発信力・行動力」，「コミュニケーション・コラボレーション力」の因子に関してもポイントは上昇しており，目標は達成できたと言える。（詳細は後述の「5(3)【実践目標①】」を参照）しかし協働学習を行う上で欠かせない「コミュニケーション・コラボレーション力」については，0.1 ポイントの上昇しか見られなかった。これは第 1 学年の「総合的な学習の時間」で協働作業を既に何回も経験しているため，生徒自身が自己の変化に気づいていないためと考えられる。

②については，113 名を 3 グループに分け，各グループがそれぞれ，トヨタ産業技術記念館，JICA 中部，日本銀行名古屋支店の 3 か所で学習を行った。本クラスでは，これまで授業として校外でのフィールドワークを行うことはなかったが，SGH の探究学習の導入することによって，初の試みとなった。

③については，様々な職業の外部講師を招聘することができ，今後の探究活動やキャリアについて考えさせる良い機会となった。

課　題：　グローバル概論は，本年度から始まった活動であるので，SGT の結果や生徒の変容が本年度限りの特異なものなのか，この活動の成果を特徴付けるものなのかについては次年度以降の実施状況を合わせて改めて考える必要がある。その上で，課題を発見し改善する。

また，当該クラスにおける第 3 学年での探究活動は，総合的な学習の時間「課題探究」（2 単位）であり，個人で探究活動を行いレポートにまとめる計画である。当該授業は「英語演習」との選択科目として実施するが，「課題探究」を選択した生徒は 8 名であった。

アンケート結果（図 1）では探究活動への意欲を感じている生徒は 34%で，感じていない生徒は 21%であるにもかかわらず，実際の選択者は，約 7%であった。

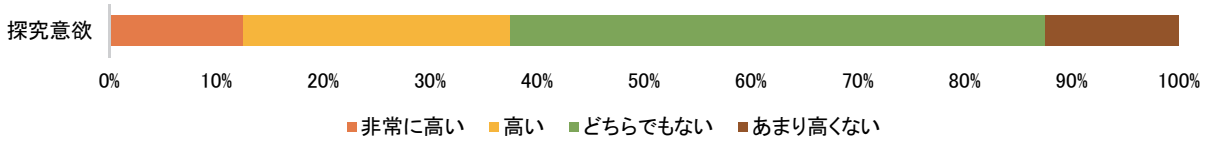


図 1　次年度以降の探究活動に対する意欲（一般進学クラス第 2 学年）

「課題探究」を選択しなかった理由としては，「進学が気に掛かる。週 2 時間を探究活動に充てると他の受験生と学力差がつくのではないかと不安になる。」との声が聞かれたが，改めて探究型学習の意義と進学における有用性について理解を深めることが求められる。

4（2）-2 海外研修

本年度は，昨年度までの検証を踏まえて，海外研修を内容的に充実させるための改変・移行期であるため，第 1 学年の「グローバルレクチャー」としての研修を 3 月にニュージーランドで行い，第 2 学年の「グローバルフィールドワーク」としての研修を 10 月にニュージーランドで，12 月に台湾で実施した。「グローバルアクション」としての研修はグローバルフィールドワークと同時に 12 月に台湾で実施した。

3 月に行うニュージーランド研修に関しては，報告書作成後の実施となるため，予定において記載する。

目　的

本校が目指すグローバルリーダー像は「地球に生きる一市民として，社会や世界の諸問題を当事者としての意識をもって捉え，他者との協働を通して解決に向かう意欲あふれる人材」とし，グローバルシチズンシップ（地球市民性）をもって行動する人物を想定している。

その育成のために，海外研修では，①世界の現状と課題に触れる経験，②自らの意見を発表し，他者と対話・議論する経験，③自らのネットワークを構築する経験の 3 点を重視して研究開発を行っている。

「グローバルレクチャー」は，上記 3 点のうち，①を主に担う。また，海外に身を置くことで，自らの壁を破り，グローバルな視野をもって自己を客観視すること，異文化との相違点や共通点を知り自己のアイデンティティを再確認することも目的とする。

「グローバルフィールドワーク」は，①②とともに，各自の研究課題に関連する分野において学習を深め，調査を実施することを目指す。

「グローバルアクション」としては，②③を主眼として，探究活動の成果を公表することを目指す。

実施の流れ

計画は本実施をはさんで事前及び事後学習を一連の取り組みとして構成し，「総合的な学習の時間」及び教科「グローバル」の授業を中心に，G サロンや自主学習も併せて実施する。

事前学習では，現地の歴史・産業等の概要，現地での調査テーマ，日本と当該国の関係等について学習し，レポートやワークシートを作成する。また，現地での訪問先には事前に質問事項を送付するとともに，現地で行う行動計画を作成して準備する。

本実施では，現地で各課題を体験的に学ぶことによって，多面的に理解するよう設計する。

事後学習では，ポスターやレポートを作成し発表する等，研修内容を振り返る機会をつくる。また，学校全体への普及の観点から，Meijo Global Festa や生徒研究発表会等にて研修成果を発表する。

4（2）-2-1 ニュージーランド研修

「グローバルフィールドワーク」は国際クラス第 2 学年を対象に，「グローバルレクチャー」は国際クラス第 1 学年を対象に実施する。

研修国の特色と学習

当該国は，先住民マオリと移民との争いと共生の歴史や，周辺の島国やアジア各地から多様な民族が集まる近年の状況から，エスニックダイバーシティを確立しつつある国である。

また，世界で最も早く女性の参政権を認め，女性の社会参加率・活躍率も高い。

そのような背景を踏まえ，産業のグローバル化も進んでいる。特に当地においては映画産業を中心とした産業観光も盛んとなっている。

したがって，現地では，協働・共生の在り方，地域産業のグローバル化をテーマとする。

対　象

グローバルフィールドワーク　37 名（国際クラス第 2 学年）
グローバルレクチャー　31 名（国際クラス第 1 学年）

実施時期

グローバルフィールドワーク　平成 28 年 10 月 1 日（土）～15 日（土）
グローバルレクチャー　平成 29 年 3 月 20 日（月）～4 月 1 日（土）
※各期間の後半は修学旅行として実施

費用（概算）

1 名につき約 40 万円（修学旅行費用を含める）

主な研修先と研修内容

国立博物館　「ニュージーランド人はどこから来たのか。歴史と現代社会とのつながり」

先住民族マオリの歴史・文化を知り，現代社会において多民族がどのように共生を果たしているのかについて，多様な資料を見ながら理解を深める。

ウェリントン市議会　「国際ビジネス・エスニックダイバーシティと女性雇用」

ウェリントン市役所で唯一の日本人職員である Aiko Collins さんから，現代のウェリントン市の国際ビジネスの状況と共に，多様な民族の協働・共生や女性の働き方をめぐる問題についての講義を受ける。

Weta Studio　「映画産業と国際ビジネスの可能性」

近年のニュージーランドの産業の一翼を担う映画産業について，「ロード・オブ・ザ・リング」等の特撮技術や特殊メークを手がける企業において，外国人の期間労働と産業観光について理解を深める。

ビクトリア大学国際ビジネス研究所　「大学と地域ビジネス」

ビクトリア大学国際ビジネス研究所の Jason Young 氏より，「地域ビジネスと世界」「世界と国家」についての講義を受ける。

※ 3 月に実施するグローバルレクチャーでは，ミツビシ・モーターズ及びトヨタに訪問し，「ニュージーランドに進出した経緯」と「ニュージーランドにおける販売戦略」について学習する。

行　程

SGH 事業としての研修は 7 日間実施する。修学旅行（5 日間）と合わせて，計 15 日間の渡航となる。

日次	都　市	スケジュール
1	中部国際空港	中部国際空港発　バンコクを経由してオークランドへ
2	ウェリントン	ウェリントンへ ホストファミリーと市内観光
3	ウェリントン	学習 1　オリエンテーション・NZ の歴史・文化 研修 1　国立博物館にてフィールドワーク
4	ウェリントン	学習 2　NZ の協働・共生 研修 2　ウェリントン市役所職員 Aiko Collins 氏講義
5	ウェリントン	学習 3　グローバルビジネスと地域 研修 3　ビクトリア大学国際ビジネス研究所訪問　Jason Young 氏
6	ウェリントン	学習 4　問題解決スキル 研修 4　映画撮影企業 Weta Studio にてフィールドワーク
7	ウェリントン	学習 5　企業活動のあり方 研修 5　Social Enterprise 代表 Alex Hannant 氏講義
8	ウェリントン	市内フィールドワーク（グローバル化と多様性について）
9	レビン	レビンへ移動し，Horowhenua College・ホストファミリー宅へ
10-12	レビン	Horowhenua College にて修学旅行
13	オークランド	レビン出発，ウェリントンからオークランドへ
14	オークランド	オークランド発　バンコクを経由して中部国際空港へ
15	中部国際空港	到着・解散

成　果

参加生徒に研修の前後で SGT を基礎としたアンケートを行った。選択肢は 5 段階の順序尺度である。事前・事後の結果を比較すると，全ての因子で向上が見られ（図 1），t 検定を行うと「論理的・批判的思考力（+0.2）」，「コミュニケーション・コラボレーション力（+0.3）」，「多様性の認識と共感（+0.3）」，「批判・摩擦・失敗への耐性（+0.3）」，「変化への対応（+0.3）」の因子で有意差が認められた($p<0.05$)。

したがって，本研修は生徒の 5S5M の向上において効果があったと評価できる。

さらに帰国後は，本研修を通して向上したと感じる 5S5M の因子を 2 つ選んでもらい（図 2），その要因についてリフレクションシートに記載させた。

結果として，向上実感が高かった因子は，順に「コミュニケーション・コラボレーション力」33%，「変化への対応」18%，「多様性の認識と共感」14%，「発信力・行動力」13%，「批判・摩擦・失敗への耐性」11%であった。

中でも「コミュニケーション・コラボレーション力」の向上実感が突出している。その理由としては，期間中の宿泊はホームステイであり，各研修も全て英語で行われていた背景から，日常生活を含めた「英語での意思疎通」が参加生徒の関心事であったであろうことが考えられる。

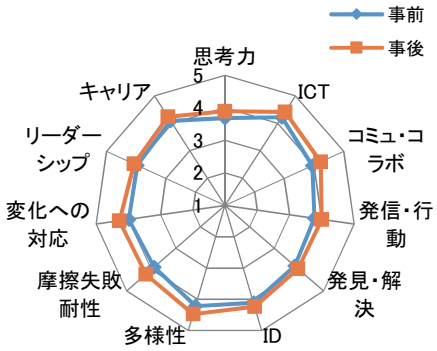


図 1　各因子に関する自己分析とその変化

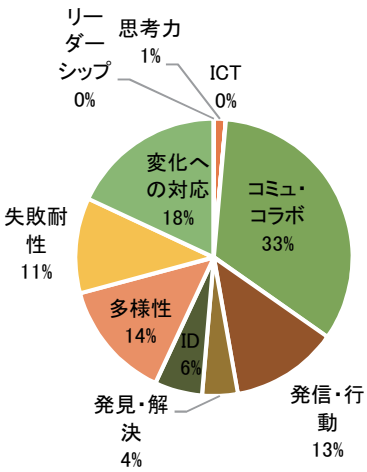


図 2　研修を終えて向上実感が高かったスキルとマインドセット

以下に，リフレクションシートに記載された生徒の振り返りの一部を掲載する。

教えてもらったバスに乗ったら，知らない街へ行ってしまった。その後，電話をかけたりしたが，自分でどうにかしなければならないことに気づき，やっと行動ができた。
自分の英語スキルが低すぎて，相手が発信してくれた言葉をいくつも取り逃してしまったことがくやしかった。また，相手から何かをもらうには，まず自分から提示することが大切であることに気付いた 学習していたにもかかわらず，ホストファミリーに日本の事（人口，宗教，都道府県の細かい話）を聞かれたとき，答えられなかった。もっと自国について知るべきだと思った。
発音が聞き取りにくいことが何度かあり，自分が理解できるまで何回も聞き直した。何回も聞き直すことに少し抵抗があって，怒られてしまうのではないかと思ったが，そのたびに言い方，スピードを変えてくれた。理解できた時は，罪悪感とうれしい気持ちが混ざった。
自分の英語力レベルの低さを痛感した。自分の言いたいことと，相手が理解することがうまくかみ合っていないことに気付いた時，それをもう一度説明しなければならなかったので，苦しかった。 文化の違いを感じた時，それをホストファミリーに話し，共感を求めようとしていたが，共感を得られなかった。その経験のおかげで，これこそが自分の学びたかった多文化・異文化であると気づき，多文化理解によりポジティブになれた。
問題意識や疑問を抱くのが苦手だった。友達は色々質問しているのに，自分だってしたいのにどうして考えられないんだろう，自分が嫌だと何度も思った。何も質問しないままでは，ただ一方的に教えてもらう情報しか得ることはできないけれど，自分から疑問点を見つけて質問したり調べたりすることで，よりたくさんの事柄について知ったり情報を得ることができる。自分自身のなかで，”これについて気になっている”と思えたときには，嬉しかった。
ホストファミリーとの会話の中で，言いたいことを伝えることがこんなにも苦労するんだと感じた。 初めて一人でバスに乗って学校から帰るとき，バス停のアナウンスがなくてどこで降りるべきなのか分からなかった。その時に日本と NZ との文化の違いを改めて感じた。一人で行動しているときに，予期せぬことがあっても，周りの人に力を借りながら対応する自信がついた。
どれだけ失敗を恐れずに話しかけていっても，通じないことがよくあり，自分の思っていた解釈をされなかった。何度も心が折れかけた。できるだけ，簡単な英語にしたり，ジェスチャーを使ったりと，より相手に伝わるように自分なりに考えた。その結果相手とのコミュニケーションもうまくとれ，少し自信がついた。

上記から，各自気づきがあったことが見て取れる。しかし，多くの生徒は，やはり日常生活や英語でのやり取りの部分に焦点を当てた回答になっており，本事業の目的の一つである，「各自の研究課題に関する学習」についての言及は少ない。

本年度の第 1 学年からは，ニュージーランドでの研修は「グローバルレクチャー」として実施するため，「探究活動の深化」を目的とするものではなくなるが，今後，台湾とインドネシアで実施するグローバルフィールドワークにおいて，どのように探究活動の深化を進めるのか，検討が必要である。

4（2）-2-2 台湾研修

本年度は,「グローバルフィールドワーク」としての研修と「グローバルアクション」に向けた研修を同時に台湾にて実施した。

研修国の特色と学習

当該国は，歴史的にも日本との関わりが深く，日系企業も多く進出しており，本校の目標としている「グローバルビジネス課題の探究」を学ぶ場として適地である。

また，研修先である台中科技大学は名城大学と 2010 年から教員の相互交流事業として，協働研究やシンポジウム等を行っており，2011 年からは名城大学経営学部の学部生及び院生が台湾でフィールドワークを実施している。特に本研修に際しては計画段階・事前学習・引率にわたって名城大学経営学部の田中教授の助言・指導を受け，高大連携が促進された。

本研修の内容としては，日系企業に訪問するとともに，台中科技大学の学生と市内研修やディスカッション等の協働学習を行う。また，グローバルアクション参加生徒のうち，課題研究を行った生徒は台中科技大学にて発表を行う。以下のテーマのうち「グローバルフィールドワーク」では①～③,「グローバルアクション」では③・④を主眼とした。

①日系企業の台湾進出における現状と課題発見
②日統時代のレガシーからみる日本と台湾のつながり
③現地大学生とのディスカッション
④課題研究活動の成果発表

対　象

グローバルフィールドワーク　12 名（国際クラス第 2 学年 12 名）
　参加者は，国際クラス第 2 学年の希望者から，選抜のうえ決定した。
グローバルアクション　8 名（国際クラス第 3 学年 5 名・G サロン参加者 3 名）
　参加者は，国際クラス第 3 学年と G サロンに参加した生徒を対象にして，希望者から選抜のうえ決定した。

実施時期

平成 28 年 12 月 12 日（月）～12 月 19 日（月）　7 泊 8 日

費　用（概算）

1 名につき約 15 万円

主な研修先と研修内容

慧國工業股份有限公司（アイシン精機現地企業）

1979 年にアイシングループに入り，1985 年からトヨタ生産方式を取り入れ，現地のニーズに合った製品を生産している。台中市の工場を訪問し，経営顧問の大野義男氏から事前質問に対しての説明を受けた。日系企業の進出事例を知る機会となった。

旭硝子顯示玻璃股份有限公司（旭硝子現地企業）

雲林県にある工場を訪問し,副社長の金原正和氏の説明を受けた。従業員のダイバーシティを重視しており，その国の文化，慣習，価値観を尊重しつつ，旭硝子グループとしての考え方を融合させる努力をしている。進出先での現地化と協働のあり方について学ぶことができた。

台中科技大学

ディスカッション，発表，企業訪問・市内における協働学習を行った。

主な学習のテーマは「環境保護と経済活動」「企業の海外進出」「文化創意産業」である。

グローバルアクションの生徒は，課題研究内容の発表を行い，台中科技大学の教員に講評をいただいた。発表後の質疑応答から，日本では気づかなかった視点に気づくことができた。

企業訪問や市内研修だけでなく，毎日午前中から夕食までを現地学生と過ごす中で，有意義な学習となった。

國立歴史博物館

博物館で台湾の歴史を学ぶ中で，日本統治時代の説明を聞き，台湾と日本との関係を改めて認識することができた。

烏山頭水庫風景區

日本統治時代の台湾で，八田與一氏が建設した烏山頭ダムや八田與一記念室等を見学した。八田氏の偉業と当時の台湾情勢・世界情勢を知ることが出来る。生徒は日本では知ることが出来ない台湾と日本との関わりについて再認識した様子であった。

行　程

下記の旅程で実施した。平成 28 年 12 月 12 日（月）～12 月 19 日（月）7 泊 8 日

	月日（曜）	都　市	スケジュール
1	12 月 12 日 （月）	中部国際空港 台北・台中	台北へ 台中科技大学の学生による案内
2	12 月 13 日 （火）	台中	午前：台中科技大学　アクション参加生徒の発表（代表生徒のみ） 午後：旭硝子訪問
3	12 月 14 日 （水）	台中	台南研修　烏山頭ダム，八田興一記念館，国立歴史博物館
4	12 月 15 日 （木）	台中	午前：台中科技大学　グループディスカッション 午後：アイシン訪問
5	12 月 16 日 （金）	台中	台中科技大学の生徒と市内研修
6	12 月 17 日 （土）	台北	台中から台北へ移動 台湾文化の研修及び体験
7	12 月 18 日 （日）	台北	現地大学生と市内視察
8	12 月 19 日 （月）	台北 中部国際空港	到着後，解散

成　果

研修の前後で SGT を基礎とした調査を行った。選択肢は 5 段階の順序尺度である。

結果として，全般的に研修後の平均値の上昇（図 1）が見られるが，t 検定では「ICT 活用能力」，「アイデンティティの確立」，「リーダーシップ」，「グローバルなキャリア形成の意欲」については有意差が見られなかった（$p<0.05$）。

「アイデンティティの確立」については，上昇が見込まれると想定していたが，想定とは異なる結果となった。アンケートを確認したところ，生徒によって開きが見られた。

「リーダーシップ」については，現地の大学生のサポートを受けて活動する機会が多かったため，上昇しなかったのではないかと考えられる。

逆に，「コミュニケーション・コラボレーション力（+0.8）」，「多様性の認識と共感（+0.5）」，「変化のへの対応（+0.6）」の 3 因子は，大きく上昇しているが，これは現地学生との協働学習の機会が多かったことが影響していることが予想される。

帰国後は，本研修を通して向上したと感じる 5S5M の因子を 2 つ選んでもらい（図 2），その要因についてリフレクションシートに記載させた。

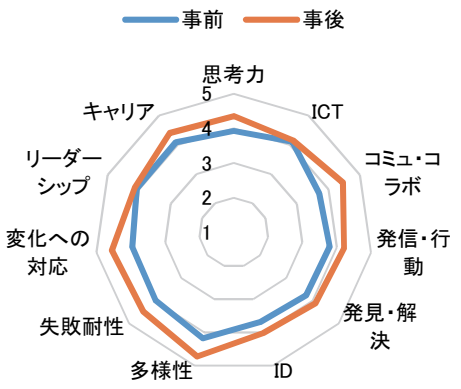


図 1　各因子に関する自己分析とその変化

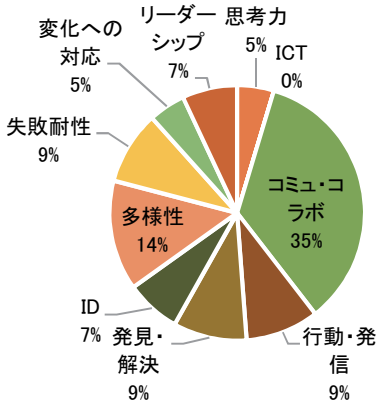


図 2　研修を終えて向上実感が高かったスキルとマインドセット

結果，「コミュニケーション・コラボレーション力がついた」と答えた生徒 15 名中の 13 名が，「台中科技大学の学生との協働学習」をその要因にあげた。なかでも自分の意見を伝え，意見をまとめ，発表する経験により力が伸びたと感じると述べている。帰国後にも「ディスカッションの時間をもっと増やして欲しかった」という声が複数あがったため，次年度よりディスカッションの時間を長く取り，より深い協働学習が出来るよう設定する。

また，「批判・摩擦・失敗を恐れない気持ち」が伸びたという生徒は，「現地生徒が好意でやってくれることを遮るようで，次の予定等をうまく伝えられず，集合時間に遅れてしまった。時間を守らなくてはいけない事情を丁寧に説明したら理解してもらえ，次からは早めに行動する等，協力してくれるようになった。意見を伝えることの大切さを実感した」と述べている。他にも 4 名の生徒から同じような経験（台湾の学生と時間についての考え方が異なり困った経験）をきっかけとして「批判・摩擦・失敗を恐れない気持ち」が向上したと述べている。

参加した国際クラス第 2 学年の生徒にとっては，現地で各自の課題研究につながる学習を進めることができ，5S5M の面での伸びはもちろん，今後の課題研究活動につながる研修となったことがわかる。

4（2）-3 ローカルフィールドワーク

目　的

社会や世界の課題に触れ，知識，スキル，マインドセットを統合して活用する学びの場とする。また，この経験を通して，自らの足を使って学ぶ姿勢や当事者意識をもって探究する姿勢を体得させることを目的とする。

内　容

グローバルな社会課題や研究課題に基づいて行う。実施した内容は以下の通りである。

国際クラス第 1 学年　（実施時間：「総合的な学習の時間」における「多文化共生」）

研　修　先	内　容
トヨタ自動車元町工場・トヨタ会館	トヨタ生産方式によるクルマづくり（ヒルトップ高校生と協働）
名古屋モスク	イスラム教の概要とムスリムの日常
名古屋市内企業課題探究	名古屋市内で担当企業の店舗・商品等を調査
JICA 中部	JICA 活動概要

国際クラス第 2 学年　（実施時間：「総合的な学習の時間」における「課題探究」）

研　修　先	内　容
名古屋市内戦跡	今池～大曽根を歩きながら戦跡を巡り，その歴史と大きさを知る
JICA 中部	JICA 概要・研修員受入事業・民間連携事業（BOP ビジネス）

国際クラス第 3 学年　（実施時間：課外活動時間）

課題研究論文作成に向けて，先行研究等で得た情報や仮説の検証を行うため実施した。

課題探究との接点		研　修　先	参加者数
外国人との協働 外国人就労	1	名古屋国際センター	5
	2	名古屋市（中・港・瑞穂・熱田）	1
	3	名古屋外国人雇用サービスセンター	3
	4	株式会社　ニコム	1
	5	株式会社　man to man	7
	6	愛知労働局	1
	7	JICE 中部支部	6
	8	シルピス大磯	1
	9	愛知県　多文化共生推進室	5
	10	JICA 中部	1
外国人との共生 外国にルーツを持つ子供たちの教育	11	緑町団地	1
	12	Nippon イニシアチブプロジェクト意見交換会	4
	13	名古屋モスク	2
	14	AULA DO KYUBA 九番団地日本語教室	2
	15	前津中学校	2
	9	愛知県　多文化共生推進室	2
伝統産業 地場産業	16	有松鳴海絞会館(計 3 回)	6(2×3 回)
	17	ファッションデザインセンター一宮（2 回）	4(2×2 回)
	18	株式会社　スズサン	2
	19	加藤七宝製作所	2
	20	友禅工房　堀部	4
	21	津島毛織物工業協同組合（2 回）	4(2×2 回)
性的マイノリティ	22	NPO 法人　G-net	2
	23	On the Ground Project	2
	24	大橋運輸株式会社	1

インバウンド観光 産業観光	25	トヨタ博物館	2
	26	大須商店街	4
	27	松川屋道具店	2
	28	那古野下町衆事務局	5
	29	名古屋商店街振興組合連合会	1
ソーシャルビジネス BOP ビジネス CSR	30	白書を読む会	1
	31	NPO バンク　momo	1
	32	NPO 法人エンドゴール	1
	33	矢田・庄内川をきれいにする会	1
	34	名古屋環未来研究所	2
	35	マイウッド・ツー株式会社	2
	10	JICA 中部	2
フェアートレード 食品ロス	36	フェアトレード名古屋ネットワーク（計 2 回）	4(2×2 回)
	37	JICA 中部	3
	38	ナゴヤ FT ユースデー　夢交流会	2
	39	セカンドハーベスト名古屋	1
知的障害者雇用	40	（株）中西	1
	41	エコパルジャパン株式会社	1
子ども食堂	42	子ども食堂フォーラム	2
	43	わいわい子ども食堂	2
女性雇用 待機児童	44	名城大学　橋場教授	1
	45	日本特殊陶業	1
	46	ポピンズのセミナー	1
	47	住友理工株式会社	1
戦争と産業の変遷 平和教育	48	戦争と平和の資料館　ピース愛知	1
	49	名城大学　鷹来キャンパス（陸軍工廠跡）	1
	50	金城学園中学高等学校	1
合計	50	延べ人数	117

一般進学クラス第 2 学年　（実施時間：「総合的な学習の時間」における「グローバル概論」）

研　修　先	内　容
トヨタ産業技術記念館	愛知県企業の歴史と変遷
JICA 中部	国際協力
日本銀行名古屋支店	貨幣流通の仕組み・金融業務

成　果

「気づき」・「発見」から「視野の広がり」・「新たなる切り口の発見」へ至り，目的としている当事者意識をもって問題解決に当たろうとする姿勢が見られた。また，国内の調査結果を海外での事象と関連させて考えることができた。

国際クラス第 2 学年では，事前準備の重要性や各自の課題研究への生かし方等を学習させるよう配慮しているが，中には第 3 学年の研修先に同行する生徒もおり，学年を跨いだ協働や年度を跨いだ研究の継続が生まれつつある。

課　題

研修先との連携を重視し，企業・教員・生徒との関係を密に取ることを心掛けた授業運営をしている。フィールドワークの受け入れ先の拡大を試みているが，研究課題に合致するところは同じところになってしまい，複数年連携することによる企業の負担は否めない。

また，ほとんどの生徒が大学に進学することもあり，大学進学後に同じフィールドで継続研究できるような企業・NPO との長期的な関係の構築と，研究課題を深化させる研究ビジョンが持てるような取り組みが必要である。

4（2）-4 Meijo Global Festa

目　的:　SGH 指定校及びアソシエイト校の生徒と議論・発表を行う機会とし，生徒中心で運営することによって主体的な行動力や発信力を育成することを目的とする。本取組の実施により，生徒のコミュニケーション力やコラボレーション力，ネットワーク構築力，問題解決能力が伸長するとともに，SGH 指定校の情報共有の場となることを目指す。

日　時：　平成 28 年 11 月 19 日（土）10:00～17:00

内　容：　生徒を対象としたフォーラム，口頭発表，ポスター発表の 3 つの部門に加え，教員を対象としたカンファレンスを実施した。フォーラムは 4 つの分科会で，それぞれのテーマについて議論を行い，ポスターを作成した。口頭発表では課題研究活動について発表を行った。ポスター発表は課題研究活動のポスターと，フォーラムで作成したポスターの発表を行った。

フォーラム部門：参加校 7 校・参加生徒 85 名

分科会 A　グローバル化時代の働き方　－対立・戦争を越えて協力・共生へ－
講師：名城大学経済学部教授　渋井康弘氏

分科会 B　国民国家とは何か
講師：名城大学経営学部教授　村松恵子氏

分科会 C　異文化の見方：文化相対主義を考える
講師：名城大学外国語学部教授　津村文彦氏

分科会 D　「グローバル化」とは？
－自分が考える"グローバル化"－
講師：名城大学都市情報学部教授　亀井栄治氏

口頭発表部門：参加校 6 校・発表 12 本（発表生徒 26 名）

講　評：名城大学経済学部教授　渋井康弘氏
名城大学経営学部教授　村松恵子氏
名城大学外国語学部教授　津村文彦氏
名城大学都市情報学部准教授　鈴木淳生氏

本校発表生徒

小出侑佳“Analyzing Needs in BOP Business”
大崎祐実・矢澤優香・吉戸知帆“A Solution of Problems over Fair Trade - For the Real "Fair" Trade -”
宮田未稀　“Offering Information for Foreign Residents”
間瀬ちの　“Companies' Responsibilities toward River Pollution”

ポスター発表部門：参加校 6 校・発表 25 本（発表生徒 37 名）

本校発表生徒

齋藤歩美　「一宮市の織物産業の現状と課題に対する提案」
三浦隆礼　「ソーシャルビジネスの現状と課題」
橋本優伽　「LGBT の方々が働きやすい職場環境の整備」
鈴木梨加　「女性の活躍の現状と今後の展望」
大矢りさ・榊原一紗　「産業観光を利用したインバウンド戦略」

西嶋優・林莉緒菜
「名古屋市の学習支援教室と子ども食堂の現状と課題」
渡邊紗彩　「AIU 高校生国際交流プログラム参加報告」
小出紗矢香・髙橋里帆・大矢栞琴・吉村日那
「エネルギーを自給自足するには」
ニュージーランド研修参加生徒
「女性雇用の日本・NZ 比較」

カンファレンス：参加校 16 校
回答・助言　文部科学省初等中等教育局計画指導係　矢田裕美氏
文部科学省初等中等教育局計画指導係　小川由香氏

全体挨拶・講評　文部科学審議官　小松親次郎氏
名城大学学長　吉久光一氏
名城大学外国語学部長　Ananda Kumara 氏

参加校一覧
愛知県立旭丘高等学校，三重県立四日市高等学校，
国立名古屋大学教育学部附属中・高等学校，愛知県立時習館高等学校，
中部大学春日丘高等学校，名古屋国際中学校・高等学校，
岐阜聖徳学園高等学校，東邦高等学校，名城大学附属高等学校
カンファレンスのみ
富山県立高岡高等学校，岐阜県立大垣北高等学校，広島女学院中学高等学校，
愛知県立津島高等学校，星城高等学校，盛岡中央高等学校，静岡北高等学校，
名古屋市立名東高等学校，中京大学附属中京高等学校，日本福祉大学付属高等学校，
愛知県教育委員会

成　果：　本事業は中部地区の SGH 指定校・アソシエイト校だけでなく一般校からも積極的な参加があり，参加校は 9 校（カンファレンス・見学を含めると 22 校），フォーラム参加生徒及び発表生徒は延べ 145 名（実 96 名），聴講生徒を含めると実人数で 200 名以上の参加となった。

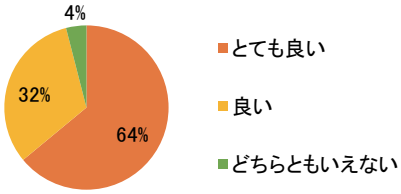


図 1　生徒実行委員の対応

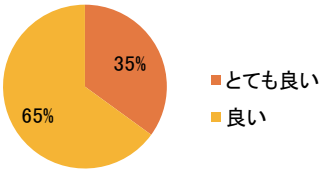


図 2　ディスカッションの内容

また，本事業は有志生徒で構成された生徒実行委員会を中心に企画・運営を行った。生徒実行委員会が実施した他校教員（全 25 名）を対象とした，5 段階（そう思わない 1⇔とてもそう思う 5）の順序尺度で聞いたアンケートから，「生徒実行委員の対応」と「ディスカッション（フォーラム部門）の内容」の結果を見ると，どちらも「とても良い」「良い」との回答が大半を占めた（図 1，図 2）。この結果から，生徒実行委員をはじめとする生徒中心の進行は好評であったとともに，生徒のディスカッションへの積極的な参加，そしてそれに伴う議論の活性化が窺える。

また，参加生徒（全 96 名）を対象にしたアンケートでは，各質問項目について 5 段階の順序尺度で聞いた。その結果を加重平均で表した結果を以下に記載する（表 1）。

結果は，全 18 項目中 14 項目において平均値が 3.5 ポイントを上回った。平均値が 4.0 ポイント以上の項目も 8 つあり，概ね成功だといえる。特に，「粘り強くコミュニケーションをとったり色々な人と力を合わせたりすることは重要だと思った」「自ら行動したり誰かに伝えたりしていくことは重要だと思った」という 2 項目が，最高平均値(4.4 ポイント)と

なり，これは上記「目的」に挙げた，コミュニケーション力やネットワーク構築力の伸長に大きく貢献するものと考える。

表 1 参加校生徒の各因子についての自己分析

質　問　項　目	加重平均
法則を見出したり，比較したり，関連付けたりしながら体系的に考えるきっかけとなった。	3.9
その分野においてコンピュータネットワークを利用することは有効だと思った。	3.8
粘り強くコミュニケーションをとったり，色々な人と力を合わせたりすることは重要だと思った。	4.4
自分から行動したり，誰かに伝えたりしていくことは重要だと思った。	4.4
様々なことから課題を見つけ，すぐに解決しなくとも地道に取り組んでいくことは重要だと思った。	4.2
自分自身やそのルーツについて考えたり，自分を肯定的に受け止めたりするきっかけとなった。	3.6
様々な文化や様々な社会，自分とは違う考えの人々に対して，興味や理解が深まった。	4.3
対立したり失敗したり挫折したりしても，「終わり」ではなく，そこからの努力や工夫次第だと思った。	4.0
想定外のことに対しても，自分なりに対処してみようという意欲をもった。	4.0
自分から周りの人に働きかけることは重要だと思った。	4.2
日本にいても海外にいても，世界の色々な問題や状況につながって生きていきたいと思った。	4.2
今日のイベントで，他校に友達ができた。	2.8
今日のイベントが，自分自身の研究活動のヒントややる気に繋がった。	3.8
今日のイベント以外にも他校等で開かれるイベントがあれば参加したい。	3.7
来年は（も）Meijo Global Festa に聴講にいきたい。	3.7
来年は（も）Meijo Global Festa のフォーラム部門に出場したい。	3.3
来年は（も）Meijo Global Festa の口頭発表部門に出場したい。	3.3
来年は（も）Meijo Global Festa のポスター発表部門に出場したい。	3.4

課　題：　上記のアンケート結果より，最もポイントが低かったものは「今日のイベントで他校に友達ができた」で 2.8 ポイントであった。アンケートだけでなく生徒へのヒアリング等からも同様の課題が裏付けられた。この他校との関わりの薄さが，イベント全体への参加意欲にも影響を及ぼし，「来年は(も)出場したい」関連の 3 項目において 3.3～3.4 ポイントと，3.5 ポイントを下回る要因となったことが推測される。これを改善するため，昼食時間を他校生徒も含めたディスカッション時間とする「ランチミーティング」の導入等，より交流を促すプログラムを展開していくことを検討する。同時に，「来年は(も)出場したい」関連の 3 項目の中では比較的ポスター発表部門への関心が高かった為，今後はプレゼンテーション部門の充実を図ることで，より参加意欲を高める内容にしたい。

4（2）-5 グローバルパスポート

目　的

研究開発目標及び実践目標（「【別紙様式 6】構想調書」参照）達成のロードマップとして，生徒各自の 5S5M の変容や活動の成果を検証評価する具体的な方法とすることを目的とする。

内　容

本制度において，(1)本校主催の探究活動や研修等の「本校事業」，(2)課題研究に伴う「フィールドワーク・プレゼンテーション」，(3)本校以外が主催の探究活動や研修，大会等の「学外事業」，(4)本校独自の「一斉英単語テスト」，(5)英検，TOEIC 等の「資格試験」の 5 項目を記録している。

各項目に該当する取り組みについては，その状況に応じてポイント（以下，「マイル」）を付与し，項目に応じた 5 種類のスタンプを用いて各自のグローバルパスポートにスタンプを押している。このことによって各生徒の項目毎の履歴や成果の確認や振り返りができるようになっている。

また，マイルチャンピオンシップと呼ぶ総獲得マイルによる 6 段階のランク設定があり，このランクアップ制度（ゲーミフィケーション）が生徒の活動への動機づけの一助になることを期待している。

本制度は，平成 26 年度末から名城大学国際化推進センターの支援を受け，開発を進めてきた。冊子形式は平成 27 年度 1 学期に完成し，本年度が 2 年目の運用となる。

平成 28 年度グローバルパスポート概要

1　対象生徒　　国際クラス在籍者及び一般進学クラス文系第 2 学年在籍者，G サロン参加者

2　対象項目・マイル数　（目標マイル　1 年修了時 2600，2 年修了時 3150，3 年修了時 4250）

（1）本校事業への参加（年間目標マイル 500）

G サロン　（参加 50 マイル）
高大連携講座・ミーティング・フェスタ（参加 50 マイル）　※運営の場合は＋50 マイル
指定の名城大学主催のイベント　（参加 50 マイル）
海外研修　（参加 100 マイル）

（2）フィールドワーク・プレゼンテーション実施（年間目標マイル 700：フィールドワーク 100・プレゼン 600）

指定のフィールドワークへの参加シート提出（1 シート 50 マイル）
指定のプレゼンテーションの実施シート提出（1 シート 50 マイル）※入賞の場合は＋50 マイル

（3）学外事業への参加（年間目標マイル　300：応募 100　出場 100　参加 100）

指定のコンテストへの応募･出場（作品応募 50 マイル 大会出場 100 マイル）※入賞の場合は＋100 マイル
指定の他大学等主催のイベント　（参加 50 マイル）

（4）一斉英単語テストの点数（100 点 100 マイル 90 点以上 50 マイル）

（5）資格試験（目標マイル 1 年修了時 550 2 年修了時 1000 3 年修了時 2100）

マイル	実用英語技能検定	マイル	TOEIC
1000	1　級	1000	940-990
800	準 1 級	500	830-935
		300	730-825
350	2　級	200	650-725
		150	550-645
150	準 2 級	100	470-545
		50	400-465

成　果

本年度のグローバルパスポート対象事業は，上記の(4)一斉英単語試験，(5)資格試験を除いて，以下の通りである。合計で 174 件の事業が実施された（表 1）。

表 1　グローバルパスポート集計結果

区　分	内　容	件　数
本校事業	G サロン・本校主催の海外研修・高大連携講座等	48
フィールドワーク プレゼンテーション	フィールドワーク	56
	プレゼンテーション	42
学外事業	他大学や他機関主催のコンクール・社会活動等	26
合　計		174

また，本年度から SGH の対象生徒が，一般進学クラスの第 2 学年文系に拡大された。その結果，グローバルパスポートを持つ生徒が 219 名となった。

以下は本年度の集計結果である（表 2）。なお，国際クラス第 2 学年，第 3 学年は過去 2 年間，または 3 年間の通算の集計結果である。

表 2　グローバルパスポート集計結果

	人数	平均獲得マイル（通算）	目標マイル達成率	最高獲得マイル（通算）
国際クラス第 1 学年	33	2213.6	27.3%	3200
国際クラス第 2 学年	37	4654.1	100%	7450
国際クラス第 3 学年	36	5356.9	88.9%	7850
一般進学クラス第 2 学年	113	665.9	0%	1450

国際クラスについては，第 1 学年を除き，平均値で各学年の目標マイル（上記「内容」を参照）を 1000 マイル以上上回っており，最高獲得者は目標マイルの 2 倍前後を獲得した。第 1 学年は平均値で目標マイルに到達していないが，24 件の「本校事業」，21 件の「フィールドワーク・プレゼンテーション」，14 件の「学外事業」等，各種の活動には積極的に取り組んだ。

一方，一般進学クラスの平均獲得マイルは，665.9 マイルで 1 年目の目標である 2600 マイルを大きく下回っており，最高獲得者においても 1450 マイルと目標マイルを 1000 マイル以上下回っている。この要因の 1 つとして，一般進学クラスは探究活動を行う授業が「総合的な学習の時間」（2 単位）のみであること，部活動への参加率が高いことから，SGH 活動への参加が進まなかったこと等が推測できる。一方で，自主的に活動に取り組もうとする生徒もおり，マイルの獲得状況を気にする声も聞かれるため，今後，本制度をきっかけとして SGH 活動が浸透していくことが見込まれる。

課　題

今後，本制度において生徒の活動意欲を喚起させるためには，生徒の活動状況を把握し，活動の質・内容に応じたマイル数と適切な目標マイル数とを設定しなおす必要があると考える。

また，マイルの集計作業は煩雑になりやすいため，どの時期にどのような方法で集計作業を行うことが効率的で正確な集計になるかを検討する。

さらに，現在，名城大学でも進行しているグローバルパスポート制度の内容との整合性や連携を図り，大学のグローバルプラザ等の利用も進めるよう調整する。

4（2）-6 グローバルサロン

目　的

自律的キャリアデザイン形成の機会として，様々な講師を招聘し，対話型の学びを深める場とする。学問分野の壁，講師と生徒の壁，理論と現実の壁を取り払って学ぶことで，将来のグローバルリーダーとなる意欲と能力のある生徒の発掘と育成を行うことを目的とする。

内　容

全校生徒を対象に土曜日に 2 時間程度実施し，参加は任意である。校内に掲示しているポスター（上図）や保護者通知，本校 SGH のブログ等でも参加を呼びかけた。本年度は学校行事との重複をできるだけ避け 7 回の実施となった。各回のテーマおよび講師は表 1 の通りである。

表 1　G サロン実施一覧

回	日　時	講　師・テーマ
1	4 月 23 日	大内ひろのしん氏　（株式会社 BLI-PRO）「やりたいことをやる！」
2	5 月 14 日	金敬黙氏（早稲田大学文化構想学部教授）「グローバル時代を生きる～地球市民の条件～」
3	6 月 18 日	柳沢究氏（名城大学理工学部建築学科准教授）「住居と文化～まちづくりを通した伝統の継承～」
4	7 月 9 日	渋谷努氏（中京大学国際教養学部教授）「多様な社会に向けて～愛知県の多国籍住民の現状から～」
5	10 月 22 日	渋井康弘氏（名城大学経済学部教授）「異なる文化を知る，知らない人生を知る」
6	11 月 14 日	四方義啓氏（名古屋大学名誉教授）　SSH・SGH 合同サロン「インドから西へと流れる学問」
7	1 月 28 日	金成克広氏（AIU 高校生国際交流プログラム事務局長） 甲斐絢氏（AIU 高校生国際交流プログラム企画主任）　「グローバルリーダーへの一歩」

本年度の G サロンに共通したテーマは，昨年に引き続き「失敗を恐れない発想とアクションを起こす」であった。特に，第 1 回は，地域の祭りイベントのプロデュース等，幅広く活躍されているタレントの大内ひろのしん氏から「アクションを起こすには，まずやりたいことを見つけ出すこと」，「やりたいことをやるには何が必要かをとことん突き詰めること」とのメッセージが，自らの失敗談を交えた生徒とのやり取りの中で繰り広げられた。

それぞれの講師からは，現状の問題点を理解したうえで，知識としての異文化理解にとどまらず，現地に飛び込み実際に現地で体験することの重要性が指摘された。

例えば，第 3 回は，名城大学のゼミで行っている「名古屋市緑区有松地区」の伝統的建築物の調査研究を紹介し，「フィールドを通した多様な体験による生の実感が活動の原動力となる。グローバル時代を生きるには，その過程で生じた体験的課題を客観化して分析し，第三者と共有できる形で表現することが大切である。」ということを学んだ。

また，第 4 回は，愛知県における多国籍住民の現状を知ることで「多様な社会に向けてどのような視点が必要か」について討論した。愛知県内に住む外国人の実態を研究課題にしている生徒からは，これまでの調査から得たデータをもとに具体的な質疑応答があり，参加した生徒は身近な問題として捉えることができた。

第 7 回は，「グローバルリーダーへの一歩」と題して，本年度 AIU 高校生国際交流プログラムの渡米プログラムに参加した国際クラス 3 年生の体験談をベースにし，主催者側の講師よりグローバルに活躍できる人材とは何かを討論した。

年間を通じてグローバルに活躍する様々な分野の講師の現実に即した話や，具体的な課題について討論することで「将来世界で活躍したい」といった強い意識をもつような生徒の育成につながった。

成　果

G サロンは昨年度よりも開催回数が 1 回減少したが，参加人数については，順調に増加している（表 2）。国際クラスについては，微減しているものの，国際クラス以外の参加者が大きく増加したのは，全校への SGH 事業の普及という観点から大きな成果だと思われる。特に国際クラス以外の参加生徒は特別進学クラスに多く（174 名／197 名中）7 回の実施に対して 6 回参加した生徒もいた。この背景には，コース・クラスの方針として，年度当初から各担任による積極的な広報や声掛けがあったことがあげられる。

表 2　年度・クラス別 G サロン参加者数

	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年
国際第 1 学年	128	117	126
国際第 2 学年	65	71	42
国際第 3 学年	67	31	32
国際クラス合計	260	219	200
一般進学第 2 学年	0	0	3
上記クラス以外　合計	30	69	197
合　計	290	288	397

課　題

国際クラスの生徒に対して，次年度の G サロンへの参加意欲についての調査を行い，5 段階の順序尺度を用いて加重平均値を出したところ，第 1 学年は 3.6，第 2 学年は 2.9 であった。

第 2 学年の意欲について経年変化を見たところ，昨年度（1 年時）は 3.7 であった。また，昨年度の第 2 学年は 3.5 であった。つまり，本年度の第 2 学年は昨年度に比較して意欲が低下しており，昨年度の同学年と比較しても意欲が低いことが分かった。

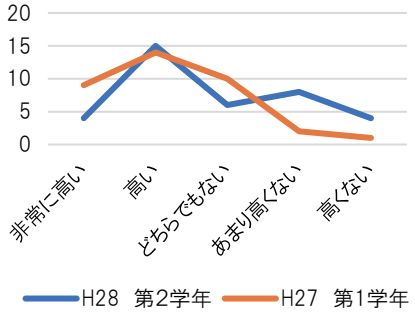


図 1　次年度の G サロンへの参加意欲

第 2 学年の参加意欲に関する回答について，昨年度と本年度で比較した（図 1）ところ，「高い」と答えた生徒数はあまり変わらないものの，「あまり高くない」「高くない」を選んだ低群が増えている。それに伴い，参加生徒数も昨年度 117 であったのに対し，本年度は 42 と減少している。その理由としては，部活動の主力メンバーになっている生徒が多いことや，G サロンでなくとも「課題探究」の授業等，他の機会においても外部講師と関わることが多いこと等があげられる。

また，一般進学第 2 学年も本年度から SGH の準対象となっているが，参加生徒数は非常に少ない（表 2）。やはり部活動との兼ね合いがあることが予想できる。

しかし，不参加の生徒においてもその意志が固い訳ではなく，生徒同士や教員からの声かけがあると出席者が増える傾向がある。そのため G サロンについての情報を増やすこと，担任をはじめとした教員が定期的に声掛けを行うこと等が効果的ではないかと考える。

4（2）-7　グローバルリーダー講座

全校生徒を対象に実施することにより，探究学習のエッセンスを広く普及する取り組みである。世界の第一線で課題解決に取り組む講師による講座であるため，「本物」，「一流」に触れることによって，生涯に渡って課題発見・探究を進める素地を作るきっかけの場とする。

回	日　時	講　師　・　テ　ー　マ
1	6月22日 （水）	飯島澄男氏（名城大学終身教授） 「科学はみることからはじまる～カーボンナノチューブの発見」
2	11月17日 （木）	佐土井有里氏（名城大学経済学部教授・アジア研究センター長） 「発展する国，停滞する国，その原動力は人～アジアの発展パワーから学ぼう～」

4（2）-8　SGH運営指導委員会の開催

前述「3(2)-6 SGH運営指導委員会の開催」にて記載。

4（2）-9　成果の公表・普及

大学教育改革フォーラム in 東海 2016

日　時：平成28年3月12日（日）9：00～15：10
内　容：分科会「高大接続」部会にて発表
発　表：羽石優子（教育開発部副部長・SGH担当）「高校での学びの変容と高大接続」

国際クラス第3学年課題研究発表会（日本語）

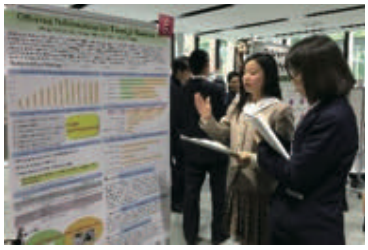
日　時：平成28年9月14日（水）8：45～15：10
内　容：日本語での研究発表
発　表：国際クラス第3学年36名
講　評：名城大学外国語学部より教員3名

国際クラス第3学年課題研究発表会（英語）

日　時：平成28年9月28日（水）8：45～14：10
内　容：英語での研究発表
発　表：国際クラス第3学年36名
講　評：名城大学外国語学部より学部長 Ananda kumara 氏をはじめ教員6名

Meijo International Forum 2016

日　時：平成28年10月9日（日）　9：00～18：00
内　容：名城大学外国語学部による研究発表会にて，ポスター発表
発　表：国際クラス第3学年9名



第2回全国SGH校生徒成果発表会（筑波大学附属坂戸高等学校）

日　時：平成28年11月10日（木）
内　容：SGH指定校生徒による課題研究のポスター発表
発　表：国際クラス第3学年
　　・宮田未稀　“Offering Information for Foreign Residents”

Meijo Global Festa 2016

日　時：平成28年11月19日（土）　10：00～17：00
内　容：東海地区SGH指定校・アソシエイト校による議論・発表
（詳細は前述「4(2)-4　Meijo Global Festa」を参照）

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL 第一回全国フォーラム　第3部優良校事例紹介

日　時：平成28年12月26日（月）　9：45～16：20
内　容：中間評価を踏まえた取り組み発表
発　表：羽石優子（教育開発副部長・SGH担当）「探究型学習のPDCAサイクル実践例」

平成28年度第2回スーパーグローバルハイスクール連絡会

日　時：平成28年12月26日（月）　9：45～16：20
内　容：第2部指定校報告として分科会の実施「生徒の資質変容の定量的評価」
発　表：SGH実行委員（鈴木・角野・柳浦・鬼頭・羽石）

生徒研究発表会

日　時：平成29年2月27日（月）　14：00～16：30
内　容：全校より選抜で研究発表
口頭発表：国際クラス第3学年課題研究発表　，
・小出侑佳　“Analyzing Needs BOP Business”
・宮田未稀　“Offering Information for Foreign Residents”
SGH台湾研修報告　第2学年4名，第1学年1名
・矢野　佐藤　鈴野　近藤　川内　金川 “Taiwan Study Trip”
ポスター発表：国際クラス第3学年　課題研究発表　5件7名
一般進学第2学年　探究学習発表　2件8名
ニュージーランド研修報告　1件5名
台湾研修報告　2件7名
参　観：名城大学外国語学部長　Ananda Kumara氏他，20名

SGH甲子園

日　時：平成29年3月19日（日）10：00～17：00
内　容：全国SGH課題研究発表
口頭発表：国際クラス第3学年
小出侑佳　“The Importance of Segmentation in BOP Business”
ポスター発表：国際クラス第3学年　宮崎詩織　「外国人児童の不就学問題」
国際クラス第3学年　渡邊紗彩　「BOPビジネスの展開に向けた事例比較」

4（2）-10 事業の評価

本校の事業については，生徒の変容を中心に，研究開発目標，実践目標の進捗状況をもって評価する。（研究開発目標・実践目標については「5目標の進捗状況・成果・評価」を参照）

生徒の評価に関しては，第1学年の4月と1月，第2学年と第3学年は1月にSGTを実施し，それを元に事業の評価を試みた。SGTの質問肢は，本校が設定した「グローバルシチズンシップを獲得するために必要なスキルとマインドセット」をもととした5S5Mの10の因子とグローバルなキャリア設計に関する因子を取り入れ設計した。（「【別紙様式6】構想調書」参照）

しかし，SGTはその時点での各項目における達成度を自己評価するものであり，各項目における具体的目標は生徒それぞれで異なっている。

したがって，本年度からは，従来のSGTや「次年度の活動意欲」の調査に加え，「5S5M等の各因子における向上実感と要因」，「各因子におけるゴール設定の変更・修正状況」の追加調査を行った。また，海外研修等においてもSGTを基本にしたリフレクションシートやアンケートを適宜実施し，事業の評価とした。

SGTの因子と質問は以下の通りである。選択肢には5段階の順序尺度を用いた。

因子：　論理的・批判的な思考力

1	物事を理解するときには，法則を見出す・比較する・関連付ける等しながら体系的に考えるようにしている。
2	日頃から筋道を立てて考えを整理するようにしている。
3	1 つではなく複数の情報源を元にいろいろな視点・立場から考えるようにしている。
4	相手の話を聞きながら並行して自分の考えや質問をまとめるようにしている。

因子：　ICT 活用能力

5	社会で生きていくうえで，コンピュータを活用することは効果的である。
6	インターネットを活用して必要な情報を収集できる。
7	わかりやすくまとめることを意識して，コンピュータを使って文章や表やグラフを作成できる。
8	わかりやすく説明したり効果的に表現したりすることを意識して，コンピュータやプレゼンソフトを活用できる。

因子：　コミュニケーション力・コラボレーション力

9	主張するときには，相手に自分の意見や立場を受け入れてもらえるように工夫して主張するようにしている。
10	相手の伝えたい気持ちや意見を引き出して聞くようにしている。
11	うまくコミュニケーションが進まないときは，新しい方法を取り入れたり工夫したりして接するようにしている。
12	仲のいい友達だけでなく，多くの人と力を合わせることに価値を感じる。
13	日頃からグループの中で自分がどのような役割をとればよいかを考えて行動するようにしている。
14	意見が一致しないときには，誰かの意見を全面的に採用するのではなく，相手も自分もどちらもともにある程度生かすこと（win-win）を意識して行動する。

（海外研修時の追加質問）

●	海外の人にも積極的にコミュニケーションを取りにいく（いった）。
●	海外に会いたい人や友人ができるだろうと思う（できた）。

因子：発信力・行動力

15	自分の主張を誰かに発信したり，発表したりすることにやりがいを感じる。
16	初めて会う人とも繋がりを作るようにしている。
17	やりたいことを実現するためには，いろいろな人を巻き込んで仲間を増やすようにしている。
18	目標達成や課題解決のためには，何をすればよいかを具体的にして行動するようにしている。

因子：課題発見力・課題解決力

19	普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち，様々な場面から問題を見つけるようにしている。
20	なんらかの課題に気づいたときは，なんとか対処しようと思う。
21	問題に取り組むときは，「何が問題なのか」を明確にして取り組むようにしている。
22	正解，不正解がはっきりしない問題に対しても解決策を考えようとする。

因子：アイデンティティの確立

23	自分自身やそのルーツとなるものについて考えることがある。
24	自分の国や世界のことについて正しく知りたいと思う。
25	他の人と比べたり，他の人よりも劣っていると感じたりすることがあっても，自分の良いところを知っている。
26	自分の将来に希望を持っている。

因子：多様性の理解と共感

27	自分が普段「当たり前」と思っているのとは違う考え方や習慣について興味がある。
28	直接かかわりがないような他人のことやよその国のことであっても，どこかで自分にもつながっていると思う。
29	自分とは違うグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う。
30	自分とは違うグループの人たちと関係を持つことは大切だと思う。

因子：批判・摩擦・失敗に対する姿勢

31	他の人と考えが違ったり，意見が対立したりしても，自分の意見を主張することは大切だと思う。
32	行き詰ってからも，粘り強く努力や工夫をし続けようと思う。
33	成功するかわからなくても，新しいことや少し難しいこと等，色々取り組んでみようと思う。
34	過程や結果から，よかったところ，よくなかったところを次に生かせるように分析することは重要だと思う。

因子：変化に対する姿勢（対応力）

35	想定外のことに対しても，自分なりに対処しようと思う。
36	うまくいかないときは，それまでの考え方ややり方にこだわらず，新たな方法を取り入れてみようと思う。
37	見知らぬ人や見知らぬ土地のなかでも，積極的に活動していけるように思う。
38	はじめての事態や困難な問題にも，しっかり取り組めば対処できるように思う。

因子：リーダーシップ

39	グループで活動するときは，周りの人に呼びかけたり働きかけたりしようと思う。
40	困難にぶつかったり，行き詰ったりした時にも前向きな提案をするように心がけている。
41	交渉やグループ活動では，着地点（妥協点）を見いだし，それに向かう見通しを立てながら，調整するよう心がけている。
42	目標達成や課題解決の為には，グループのメンバー全員が意欲を高くしたり，目標・課題を共有したりすることが重要だと思う。

因子：グローバルなキャリア設計への意欲

43	将来，日本にいても海外にいても，世界の色々な問題や状況につながって生きていきたいと思う。
44	探究型学習は，自分の将来や進路を考えるうえで重要だと思う。
45	習ったことや得た知識を日常の状況に当てはめて考え，実際に活用してみようと思う。
46	世界や社会に対して自分が貢献できることは何かを考える。

また，本校の SGH 事業の取り組み評価については，本年度の中間評価の結果を受け，現時点での一定の成果が得られたと考える。

4（2）-11 報告書の作成

校務分掌「教育開発部」副部長を中心に，授業での取り組みについては授業担当者が担当し，課外活動については活動ごとに教育開発部と引率教員が協力して担当する。それらのレポートを SGH 実行委員会が総括して報告書を作成する。

4（2）-12 他校との連絡・交流

主に以下の通り交流等を行った。表の右列には参加生徒の人数を記載した。

月　日	内　容	生徒数
6 月 3 日（金）	星城高校「星城 SGH アソシエイト活動発表会」	
6 月 3 日（金）	大阪大学「第 3 回高大接続フォーラム」	
6 月 17 日（金）	第 1 回 SGH 連絡協議会・連絡会	
7 月 31 日（水）	岐阜県立大垣北高等学校「SGH 発表会」	
8 月 9 日（火）～12 日（金）	愛知県立旭丘高等学校主催「高山 Global Summer Festa」	9 名
9 月 24 日（土）	関西学院大学「国際ボランティアフォーラム」	15 名
11 月 10 日（木）	筑波大学附属坂戸高等学校「第 2 回全国 SGH 校生徒成果発表会」	3 名
11 月 18 日（金）～19 日（土）	金沢大学附属高等学校「第 3 回 SGH 研究大会・第 26 回高校教育研究協議会」	
11 月 18 日（金）	盛岡中央高等学校（SGH アソシエイト校）と情報交換	
11 月 19 日（土）	本校主催「Meijo Global Festa2016」	81 名
11 月 26 日（土）	広島女学院中学高等学校（SGH 指定校）と情報交換	
12 月 17 日（土）	中部大学春日丘高等学校「平成 28 年度 SGH 事業報告会・成果発表会」	
12 月 26 日（月）	「SGH 第 1 回全国フォーラム」（お茶の水女子大学）	
12 月 27 日（火）	第 2 回 SGH 連絡協議会・連絡会（筑波大学文京校舎）	
2 月　4 日（土）	筑波大学附属高等学校「第 2 回 SGH 活動報告会」	
2 月 17 日（金）	富山県立高岡高等学校（SGH 指定校）と情報交換	
2 月 28 日（火）	常翔啓光学園中学校・高等学校と情報交換	
3 月 18 日（土）	岐阜聖徳学園高等学校「第 3 回ぎふグローバル人材育成推進モデル事業フォーラム」	
3 月 19 日（日）	関西学院大学「SGH 甲子園」	8 名

5　目標の進捗状況・成果・評価

本校の「研究開発目標」と「実践目標」に沿って記載する。

5（1）　【研究開発目標①】

高大の連携･協働を進め，グローバルリーダー養成のための各種プログラムを本校独自の取り組みである｢グローバルパスポート｣制度において 25 件以上実施する。

進捗状況・成果・評価

本目標における「各種プログラム」とは，グローバルパスポート制度における「本校事業」とする。

本年度の本校事業としては 48 件のプログラムを実施した。これは昨年度の 29 件よりも大幅に増加しおり，本校 SGH 事業が活性化していることの現れと考えられる。

表 1　グローバルパスポート集計結果

区　分	内　容	件　数
本校事業	Ｇサロン	7
	高大連携講座等	7
	授業内での大学教授等による講座	18
	ＳＧＨフェスタ等成果研究発表会	4
	海外研修（ＮＺ×2・台湾・オーストラリア）	4
	名城大学主催事業	1
	海外交流（台湾・アメリカ・オーストラリア）	3
	公表・普及活動	4
合　計		48

表 1 の各種取り組みへの参加者は，国際クラスは，第 1 学年（33 名）が延べ 392 名，第 2 学年（37 名）が延べ 345 名，第 3 学年（36 名）が延べ 176 名，一般進学クラス第 2 学年（113 名）が延べ 689 名であった。ここから平均すると，国際クラス第 1 学年は 10 回，第 2 学年は 9 回，第 3 学年は 5 回，一般進学ラス第 2 学年は 6 回程度参加していることとなり，国際クラス第 3 学年や一般進学クラス第 2 学年の参加数が少ない。

次年度以降の課題及び改善点

プログラム数としては目標を達成しているが，さらに参加者を増やすために，参加数が少ない要因については検証が必要である。想定される要因としては，①昨年度までに同様のプログラムに参加している，②本校プログラムに参加しなくても各自で活動を行っている，③プログラム内容が当該クラス・学年のニーズに合っていない，④参加する意欲・時間がない，の 4 点が考えられる。

①②は，本校の SGH 事業が，ある程度定着・発展してきた結果と考える。③についてみると，本年度の「本校事業」における各クラス・学年に向けた独自プログラムは，国際クラス第 2 学年が 15 件であるのに対し，第 1 学年 2 件，第 3 学年は 1 件，一般進学クラス第 2 学年は 4 件であった。クラス特性や学年の違いによって，興味関心，学習分野や学習の程度，探究活動の程度も異なるため，今後，学年・クラスのニーズより考慮したプログラムの実施が必要であろう。④においては，意欲の喚起について工夫を続ける。

5（2）　【研究開発目標②】

PBL におけるコンフリクト・レゾリューション，ジグソー学習，フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

進捗状況・成果・評価

昨年度より，校務分掌「教務部」内にアクティブラーニングに関する研究部会をつくり活動しているが，本年度は，初めて，普通科・総合学科・教育開発部による教員研修「探究的な学習報告会」を自由参加形式で実施した。

当日は各クラス・コースからなされる 9 つの発表（表 1）に対して，49 名の教員が参加した。

表 1　教員研修「探究的な学習報告会」発表一覧（網掛け部は SGH 事業の関連科目）

学年	科	クラス・系列	教科・科目名
1	普通科	一般進学クラス	「総合的な学習の時間」―探究基礎
		特別進学クラス	学校設定教科「スーパーサイエンス」―SSⅠ
	総合学科	全クラス	学校設定教科「総合」―産業社会と人間
2	普通科	一般進学クラス理系	学校設定教科「スーパーサイエンス」―SSⅡ
		一般進学クラス文系	「総合的な学習の時間」―グローバル概論
		特別進学クラス	「総合的な学習の時間」
全	普通科	SS クラス	学校設定教科「スーパーサイエンス」－SSⅠ，SSⅡ等
		国際クラス	「総合的な学習の時間」―多文化共生・課題探究 学校設定教科「グローバル」国際教養等
	総合学科	社会探究系列	学校設定教科「総合」－社会探究，探究入門，探究実践

表 1 の通り，本校において，「総合的な学習の時間」及び学校設定教科「グローバル」，「スーパーサイエンス」，「総合」については，ほとんど全ての授業が PBL であり，ジグソー学習等の各種の手法を使用している。

学校設定教科については，「グローバル」は主に普通科国際クラス，「スーパーサイエンス」は主に普通科スーパーサイエンスクラス，「総合」は総合学科で展開されているため，本校においては「国際クラス」及び「スーパーサイエンスクラス」，「総合学科」が探究的な学習を推進してきた経緯がある。

しかし，国際クラスが創設 14 年目，スーパーサイエンスクラスが 9 年目，総合学科が 17 年目を数え，当該クラス・学科において探究的な学習を推進してきた教員が，他の学科・クラス・系列へと異動している。その影響もあり，一般進学クラスや特別進学クラスにおいても探究的な学習が開発・定着してきている。

同様に，探究的な学習を推進してきた教員を中心に，「総合的な学習の時間」や学校設定教科目だけでなく，所属教科の授業においても PBL 等を導入・展開している（表 2）。

また，これまで，本校においては，各教科での PBL やジグソー学習等探究的な学習手法による授業展開を公開授業で公表することはあっても，実態調査をすることはなかった。今回，各教科を通して調査を行い，教科員が互いに情報を共有できる形となったことは一つの成果と考える。

表 2　総合的な学習の時間･学校設定教科以外でのアクティブラーニングの実践

教　科	内　容
国　語	図書館での資料探究 文章を作成させ，グループ学習 各単元におけるグループディスカッション・プレゼンテーション
社　会	朝日訴訟等，政治経済分野におけるグループ討議 近代思想等，倫理的分野におけるジグソー学習 国際紛争・国際経済についての PBL
数　学	和算についての PBL（英語科と連携） 各単元における反転学習
理　科	生態系・高分子化合物についてのジグソー学習 問題演習におけるジグソー学習
英　語	キング牧師のスピーチ・貧困・差別に関わる PBL 和算についての PBL（数学科と連携） 英字新聞を用いたテーマ学習 各単元におけるジグソー学習・ディスカッション
体　育	社会と健康・交通事故・応急手当等についてのグループワーク 医薬品とその活用等についてのジグソー学習
家　庭	調理実習におけるグループワーク

したがって，現在，コアとなる教員を中心に展開例が増えている。また，それを共有する研修会の開催や調査報告による公表を通して，今後なお一層広がりを見せることが予想される。

次年度以降の課題及び改善点

課題としては，①各教科に拡大してきているものの，取り組む教員に偏りがあること，②取り組みが広く共有されてこなかったことがあげられる。

①は，担当クラスが小さな母集団であったり，協働できる担当教員がいたりする場合は比較的円滑かつ系統立てて展開できるが，母集団が大きく，担当教員が複数に渡ると展開が困難になっている。特に非常勤講師が担当である場合，実施は難しいのが実情である。

したがって，各教科の専任率を上げるとともに，教員用のガイドラインの作成を進めることが必要であろう。

②は，総合的な学習の時間や上記の学校設定教科で行う探究的な学習については教員研修でも共有されたが，5 教科をはじめとした教科におけるアクティブラーニングは教科内でも把握・共有されてこなかった。本報告書の作成に合わせて各教科に調査し，取り組みの状況を把握しつつあるが，今後も継続して取り組みの共有が必要である。

5（3）　【実践目標①】

探究型学習を通して，自らネットワークを構築し，協働して問題解決に向かう，スキルとマインドセットを育成する。

進捗状況・成果・評価

本校では「スキルとマインドセットの育成は，グローバルシチズンシップの獲得に有効である」との仮説をもとに研究開発を実施している。（スキルとマインドセットについては「4 研究開発の実績」を参照）育成の手法として探究型学習を用いるが，課題研究に関わる授業に加えて，課外活動における「G サロン」，「グローバルリーダー講座」，「海外研修」，「フィールドワーク」を探究型学習として実施した。

本事業においては国際クラスが主対象，一般進学クラスは準対象となっており，国際クラス第 1 学年と一般進学クラスの第 1 学年，第 2 学年には，SGT を 4 月と 1 月に実施して，その変容を調べた。また，国際クラス第 2 学年と第 3 学年は昨年度 1 月のデータがあるため，本年度は 1 月のみ SGT を行い，比較した。（SGT については，「4(2)-10 事業の評価」を参照）

その結果，国際クラス生徒においては，昨年度はどの学年も全ての因子において SGT のポイントが大幅に上昇したのに対し，本年度はほとんど上昇しておらず，第 2 学年においては下降している因子も見られた。この要因については追加調査を後述する。

一般進学クラス第 2 学年においては，多くの因子が向上し，t 検定において有為であるという結果が出た。（$p<0.05$）

各因子の平均値では，国際クラスは 3.9～4.1 であり，一般クラスは 3.5，3.6 であった。

以下に SGT 結果を記載する。（図 1～図 5 にある凡例において，春は 4 月，冬は 1 月を指す）

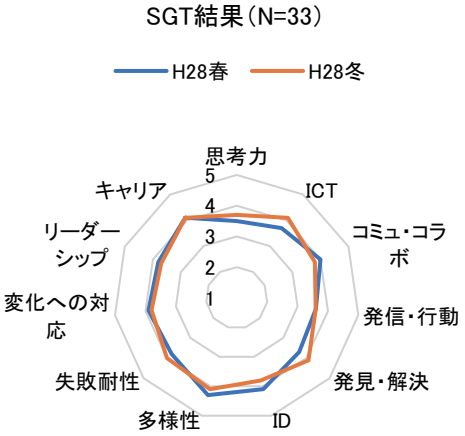


図 1　国際クラス第 1 学年
各因子の変化

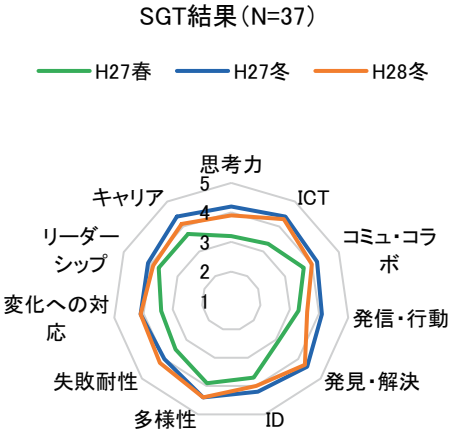


図 2　国際クラス第 2 学年
各因子の変化

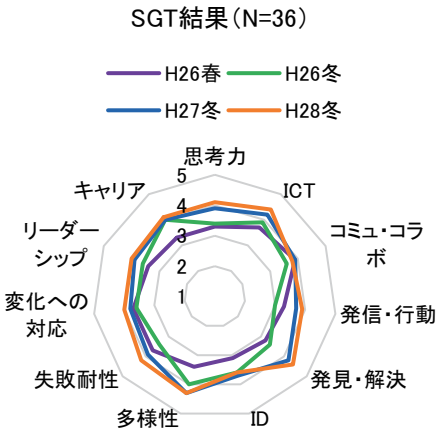


図 3　国際クラス第 3 学年
各因子の変化

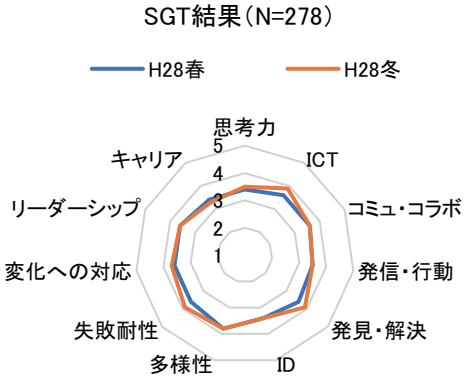


図 4　一般進学クラス第 1 学年
各因子の変化

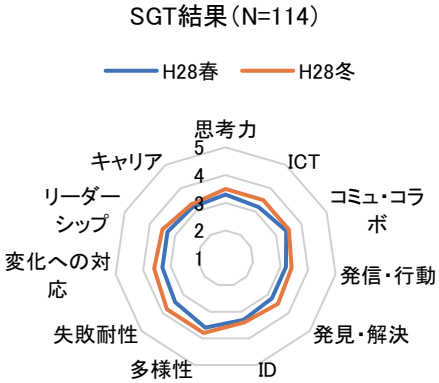


図 5　一般進学クラス文系第 2 学年
各因子の変化

探究型学習の授業は，主対象である国際クラスでは，第 1 学年から「総合的な学習の時間」における「多文化共生」（2 単位）を実施し，第 2 学年では「国際教養」（4 単位）や「課題探究」（2 単位）にて，上級生との合同授業を含めた探究活動等を行う。第 3 学年では「課題探究」（4 単位）を行うが，3 年間を通じて国語，公民，英語等の授業においても探究型学習の視点を取り入れて実施している。

一方，一般進学クラス第 1 学年での探究型学習を中心に実施する「探究基礎」（1 単位）は，4 クラスずつ合同で学習することが多く，100 名を超える生徒に向けた授業展開がなされている。第 2 学年では，文系の生徒のみ「グローバル概論」（2 単位）を履修する。

以下に各対象生の結果をまとめる。

【主対象生：国際クラス第 1 学年】

① 本年度 1 月時点で，11 因子中 4 つの因子の平均が 4.0 を超え，各因子の平均は 3.9 ポイントである。

② 4 月の結果と比較すると各因子の平均ではほとんど変化が見られないが，t 検定を行ったところ，「ICT 活用能力（+0.4）」と「アイデンティティの確立（-0.3）」は有意であった($p<0.05$)。

③ 昨年度までの第 1 学年に比較して，4 月時点における各因子の値が高い。平成 26 年度入学生，平成 27 年度入学生の各因子の平均値がともに 3.5 であったのに対し，平成 28 年度入学生では 3.9 ポイントとなっている。これについての理由は言及できないが，国際クラスへの入学生の層の変化や，SGH についての理解が進みつつあることが想定される。

【主対象生：国際クラス第 2 学年】

① 本年度 1 月時点で 11 因子中 8 つの因子の平均が 4.0 を超え，各因子の平均は 4.1 ポイントである。

② 昨年度の 1 月の結果と比較すると各因子が平均 0.2 ポイント下降している。

③ 昨年度の 1 月の結果と比較して t 検定を行うと，「論理的・批判的思考力（-0.3）」，「コミュニケーション・コラボレーション力（-0.2）」，「発信力・行動力（-0.5）」，「課題発見力・課題解決力（-0.1）」，「グローバルなキャリア設計の意欲（-0.3）」の 5 つの因子において，有意差が認められた($p<0.05$)が，それらの因子の値は全て下降している。

④ 値が下降した要因は今後の調査が必要であるが，昨年度の値が高い（平均 4.2 ポイント）こと，上級生と合同の授業「課題探究」が開始されたこと，海外研修等の校外での活動数が増えたこと等によって，自己評価が下がったことは想定される。

⑤ 入学時から見ると平均して 0.6 ポイント上昇しており，「リーダーシップ」を除く全ての因子の結果において有為である($p<0.05$)。特に，「課題発見力・課題解決力（＋1.2）」，「ICT 活用能力（＋1.0）」，「論理的・批判的思考力（＋0.7）」，「批判・摩擦・失敗耐性（＋0.7）」，「変化への対応（＋0.7）」において，大きく上昇している。

【主対象生：国際クラス第 3 学年】

① 本年度 1 月時点で 11 項目中 8 項目の加重平均が 4.0 を超え，平均 4.1 ポイントである。

② 昨年度 1 月の結果と比較すると各因子が平均 0.1 ポイント上昇している。

③ 昨年度 1 月の結果からと比較して t 検定を行うと，「ICT 活用能力（＋0.2）」，「批判・摩擦・失敗への耐性（＋0.3）」の因子で有意差が認められた($p<0.05$)。

④ 昨年度からの変化はあまり有意差が見られなかったが，入学時の結果との変容では平均して 0.7 ポイント上昇しており，「論理的・批判的思考力（＋0.7）」，「ICT 活用能力（＋0.5）」，「課題発見力・課題解決力（＋1.0）」，「多様性の認識と共感（＋0.3）」，「批判・摩擦・失敗耐性（＋0.8）」，「変化への対応（＋0.4）」，「リーダーシップ（＋0.4）」で有為である($p<0.05$)。

【準対象生：一般進学クラス第 1 学年】

① 本年度の 4 月，1 月とも，各因子の平均は 3.6 ポイントである。これは昨年度の一般進学クラス第 1 学年の値と比較すると，0.2 ポイント高い。（「平成 27 年度報告書，6 目標の進捗

状況・成果・評価と次年度以降の課題（3）【実践目標①】」参照）

② 本年度の 4 月の結果と比較して t 検定を行ったところ，「ICT 活用能力（＋0.3）」と「批判・摩擦・失敗への耐性（＋0.3）」の因子で有意差が認められた($p<0.05$)。その他においてはほとんど変化が見られないが，「探究基礎」は 1 単位での実施であるため，様々な因子において向上実感をもつほどには深化できていなかったといえる。第 2 学年では，理系に進む生徒は SSH の要素を，文系に進む生徒は SGH の要素を深めていくが，第 1 学年はその基礎的段階であるため，ある程度予測の範囲内であった。

③ 有意であった「批判・摩擦・失敗への耐性」因子の中で，特に大きくポイントを伸ばしたのは，質問 No.32 の「粘り強く努力・工夫すること」と，No.34 の「過程や結果を分析することが重要」の項目である。昨年の同時期の調査と比較してもこの項目については高いポイントが出ている。この要因としては，「探究基礎」の授業のみならず，日々の諸活動に対する教員の丁寧な指導，助言が影響したことも推測できる。

【準対象生：一般進学クラス第 2 学年】

① 本年度の 4 月の各因子の平均は 3.3 ポイント，1 月の平均は 3.5 ポイントである。

② 本年度の 4 月の結果と比較すると，ほとんど全ての因子において上昇が見られた。t 検定によると「批判・摩擦・失敗への耐性（＋0.4）」因子をはじめ，「グローバルなキャリア形成の意欲」を除いた全ての因子で有意差が見られた（$p<0.05$）。

SGT は各因子における達成度についての自己評価を測るものである。各因子における目標は伝えているものの，生徒たちの到達したい目標はそれぞれに微妙に異なっている。つまり，目標やゴールイメージが高い生徒は値が低く出るということになる。

本報告書では，国際クラス生徒における「値が高いながらも停滞・下降」の結果に注目し，その背景には活動を通して目標・ゴール設定が上方修正されることがあるのではないかと仮説を立て，国際クラス第 3 学年を対象に「各因子におけるゴール設定の変更・修正状況」について追加調査を行った。当該クラスは SGH 事業の主対象として活動してきたクラスである。

結果としては，86%の生徒がゴール設定は途中で「上がった」，14%が「変わらなかった」と答えており（図 6），多くの生徒が上方修正していることが分かった。

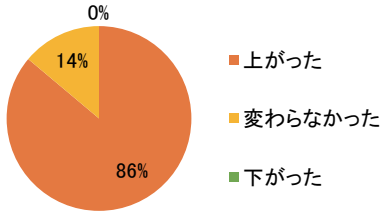


図 6 各因子におけるゴール設定の変更

各因子の目標やゴール像が上方修正されると達成度は低下する。SGT 値の下降要因の 1 つにはこのような現象もあるといえる。

また，ゴール設定変更の理由を自由記述で書いてもらったところ，「変わらなかった」と答えた生徒は，「当初の目標にも到達できていなかったから」，「自分にとって最も難しいことをゴール設定していたので」，「自分の努力が足りていなかった」，「目標を意識できていなかった」と回答した。ゴール設定が「上がった」と答えた生徒の自由記述は以下にまとめた。

目標を目指しているうちに視野が広くなり，その度に目指す目標が高くなっていったから。
過去の自分は「考えること」が面倒臭く嫌だったが，少しは考えられるようになってきたから。
当初はただ英語ができるようになりたいと思っていただけだったので，他の面でもこんな風に伸びると思ってなかったし，少しずつできることが増えるにつれてもっと能力を伸ばしたいと思うようになった。
前に比べて現在の目標ラインがものすごく上がったと感じた。周りも上がったと同時に自分のラインも上がった。クラス全体が見る場所が変わったように思う。
3 年間で確実に成長していると感じるからです。先輩たちがやっていた課題研究論文を自分も出来るか不安だったけれど，やり始めたら目標をアップデートして考えられるようになった。
周りの友達に刺激され，「なりたい自分」になるために学ぶことに，欲が出るようになったから。
当初はついていくことが目標だったが，その先を考えるようになったから。
できないと思い込んでいたことが多く，やってみるとそれほど難しくなく，挑戦してみようと思ったから。

目標ラインにたどり着くと，その先が見えてきたから。
少しレベルが上がると，疑問を持たずに飲み込んでしまい，思考が止まっていたことがあり，もっと対応できるようにしようと思ったから。
他の SGH 指定校生と会うなかで自分の未熟さを感じ，もっとこうなりたい等と考えさせられて，モチベーションが上がったから。
成長するにつれ，見える世界も変わっていくため，目指すべき場所がより高くなっていったから
自分が成長すると，当たり前のように周囲も成長していて，負けられないと思っていた。「もっとやってみたい，深めてみたい」という意欲が高まったから。
まぁいいやだったことが，今はそうしたくないと思う。

また，5S5M の各因子における向上実感とその要因についても調査した。

その結果，高い向上実感を得た因子は，スキルでは「コミュニケーション・コラボレーション力」，「論理的・批判的思考力」，マインドセットでは「多様性への理解と共感」と「変化への対応力」である（図 7）。

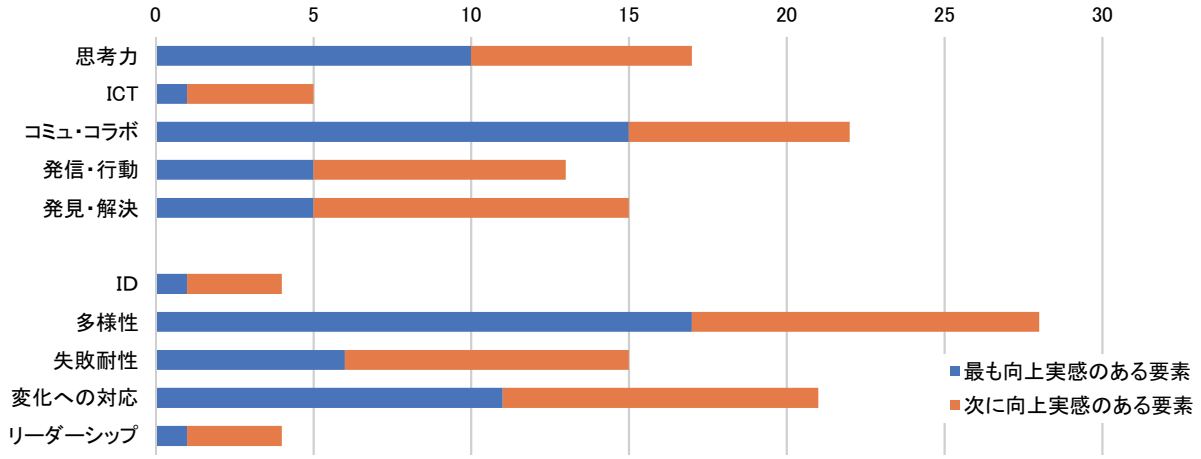


図 7　5S5M のうち向上実感が高い因子

その結果を踏まえ，各因子において「向上実感がある」と答えた生徒に，その答えを導くことになった要素を聞いた（図 8）。（選択肢の要素は前述「4(2)-1-1 総合的な学習の時間：多文化共生（2 単位）」を参照）

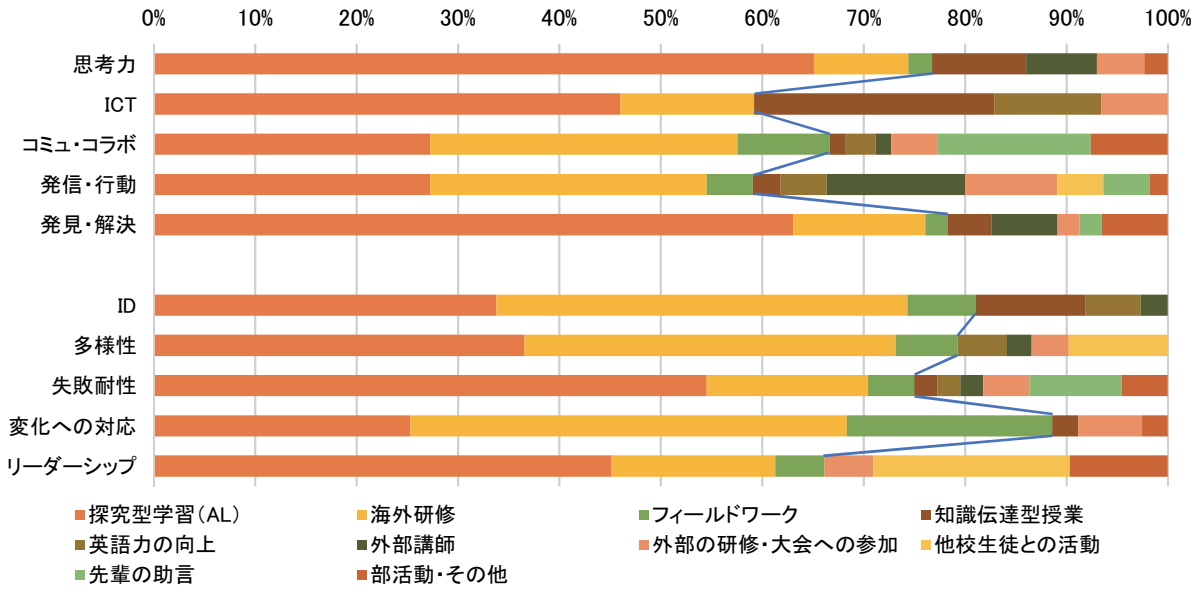


図 8　向上実感に影響したと考える要素

この場合，回答の要素 1～3（「探究型学習」，「海外研修」，「フィールドワーク」）は，「探究型学習」と考えられるため，区分線より左側は「探究型学習」が向上実感に影響したといえる。すなわち，すべての因子においておよそ 60%以上が影響したといえる。

逆に，最も向上実感を得られなかった因子をきくと「リーダーシップ」であった（図 9）。その際，「なぜ向上実感を得られなかったか」との質問に対して 9 つの要素から選択してもらったところ，「元から苦手意識があり，目標に届かなかったから」という回答が最も多く，過半数を占めた（図 10）。その中で注目すべきは，「他因子の向上実感と比較すると低かったから」（26%），「目標が上方修正されたので到達しなかった」と，向上はしているものの十分ではないという理由が多く，「その因子を伸ばす必要を感じない」，「成果が見えない」といった回答を選ぶ生徒はいなかった。そこから，何らかの努力はしており，ある程度の向上実感は得ていたであろうことが推察される。

これらの結果を分析すると，国際クラス生徒における SGT の値の停滞・下降の背景には，探究活動を行う中で目標やゴール設定をより高くしていくことが要因の一つであること，5S5M については探究型学習を通して向上実感を持っていること， 探究型学習について意欲が減退している様子は見られないことが分かった。したがって，探究型学習を通してのスキルやマインドセットの育成についてはの一定程度効果を認められる。

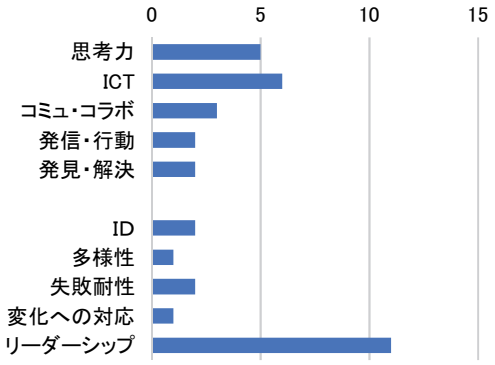


図 9　5S5M のうち最も向上実感のない因子

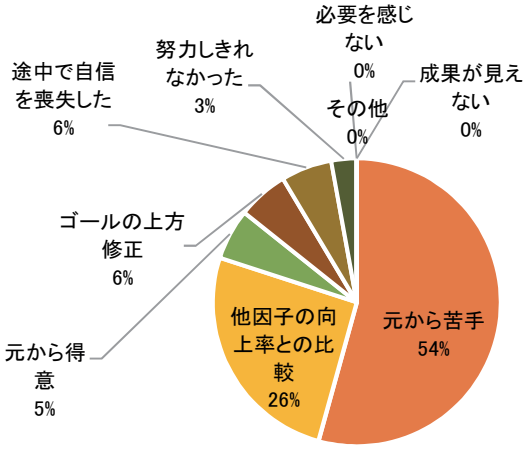


図 10　向上実感が得られなかった理由

次年度以降の課題及び改善点

国際クラス第 1 学年において，SGT ポイントが低下した「アイデンティティの確立」因子に注目し，どの質問項目のポイントが下がっているかを分析したところ，質問 No.28「自分の将来に希望を持っている」のポイントの低下が有為であった。これについては，中学時代に抱いた夢と高校生活が始まってぶつかる壁との葛藤が生じていると推察されるが，この項目については SGH 事業の根幹に関わる内容であるため，追跡調査を行い，指導に生かすとともにポイントが回復する手立てを検討する。

また，前述の状況を概観すると，本年度と昨年度の探究型学習に何らかの違いがあったのか，一般進学クラスと国際クラスにおいて，カリキュラム以外にどのような差異があるのか，といったことも，今後，調査する必要があろう。

さらに，探究型学習の成果・効果は認められるが，対象生徒において，5S5M の各因子等が意味する具体的な内容について共通理解がなされているわけではない。今後はその点を考慮して，目指すべき資質と学習内容の具体化を図る。

5（4）　【実践目標②】

国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに 4 回以上実施し，それらの実践的活動を通して，ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

進捗状況・成果・評価

課題研究論文完成までに 4 回以上のフィールドワークをするという目的においては，本年度の国際クラス第 3 学年は 100%の達成率であった。2 年時に全員が 5 回，海外でのフィールドワークは 2 回実施している。

しかし，第 3 学年では，課題研究論文作成における調査のため，課外活動として各生徒が研究課題のテーマに基づき，企業や団体等に赴き聞き取り調査や質問紙調査等を行った。本年度に実施したそれらのフィールドワークだけを抽出すると，その数は合計で，フィールドワーク先 50 件，フィールドワーク回数 55 回，参加生徒延べ 117 名（前述の「4(2)-3 ローカルフィールドワーク」を参照）であり，回数別に集計すると，4 回以上実施した生徒は 16 名（36 名中）で 44%であった（図 1）。

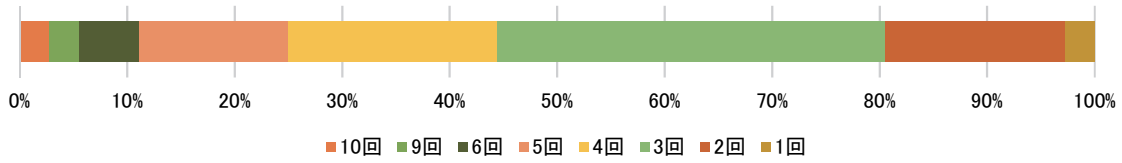


図 1　今年度に実施した課題研究論文に直結したフィールドワーク数（国際クラス第 3 学年）

また，国際クラス第 2 学年でも，クラス全体で行う国内外でのフィールドワーク以外に，第 3 学年のフィールドワークに同行して自身の探究活動を進める生徒もおり，そのフィールドワーク件数は，5 件～9 件程度となった。一般進学クラス第 2 学年でも全体で 3 件実施した。

このように第 1 学年や第 2 学年までに実施したフィールドワークの経験は，課題探究活動におけるテーマ設定に影響するとともに，その後のフィールドワークにおいて，すでに得られた知見や経験を反映させてより深い調査を可能としている。その事例として，「BOP ビジネス」に関する諸課題をテーマとした生徒たちの国内企業でのインタビュー調査では，「海外でこういった事例を調査してきたが，御社ではどのようにしているのか」等のやりとりが展開された。

さらに，次年度のフィールドワークに対する意欲を調査した。国際クラスは第 1 学年も第 2 学年も意欲が高く（図 2），加重平均ではそれぞれ 4.1，4.4 であった。特に第 2 学年はすでに課題研究論文の作成に向かい始めており，次年度早々に個別のフィールドワークを実施していくため，意欲が高まっていることが予想できる。また，国際クラスは縦のつながりが強いため，第 1 学年も上級生の姿を見ており，「国際クラスであることとフィールドワークは不可分」という認識ができつつあるのかもしれない。

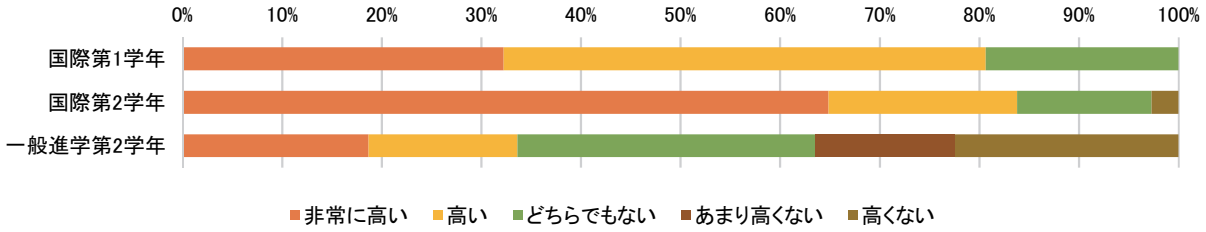


図 2　次年度のフィールドワークに取り組む意欲

一方で一般進学クラス第 2 学年の意欲はあまり高くなく，加重平均で 2.9 であった。当該クラスにおいては, 選択した生徒のみが次年度の SGH 関連授業を受けるが, 現時点では 8 名（113 名中）となっている。すなわち，一般進学第 2 学年の生徒のうち，ほとんどが次年度にフィールドワークを実施する予定がないこともその要因の 1 つであろう。

次年度以降の課題及び改善点

国際クラス第 3 学年において，課題探究の内容や，国内でのフィールドワークでのインタビュー調査の場面の質疑等からは「ローカルとグローバルを往還する視座を獲得」できたと考えられるケースが多々見られた。また第 2 学年，第 1 学年でも各フィールドワークの事前の準備にローカルとグローバルの視点を意識させるよう工夫しており，事後のレポートや発表で，その視点で自分たちの活動を振り返っている様子が見受けられた。

「ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる」ことを直接的に数値で測ることは難しい。しかし，ここで示したような事例や，フィールドワークへの参加意欲から見ると，本目標においては一定の成果が見られたと考える。

また，本年度より，課題探究に取り組む授業の一部は，第 2 学年と第 3 学年がともに取り組んでいる。次年度はフィールドワークへの参加が同じ学年の生徒同士ではなく，先輩後輩がともに出かける機会を多く設けることで，より本目標の効果が得られると考えられる。

一般進学クラスにおいては，現状のように 3 クラス（113 名）に対して，全体で行うにしても個別で行うにしても，受け入れ先，引率・指導教員，時間調整等の問題から実施自体が難しいのが現状である。その中でも本年度は 3 件のフィールドワークを行ったことは成果であったが，今後はフィールドワークの質を高めるとともに，探究活動の中で効果的に位置づけていくよう，模索する。

5（5）　【実践目標③】
国内外の研修，大会及び社会活動に年間 3 回以上参加させる。

進捗状況・成果・評価

国内外の研修，大会及び社会活動に年間 3 回以上参加した生徒の割合は，国際クラス全体で 80.2%であり，国際クラス第 1 学年及び第 2 学年については 100%達成できた（表 1）。

表 1　実践目標③の結果

区　分	応募・参加数	1 人あたりの平均参加数	目標達成割合
国際クラス第 1 学年	390	11.8	100%
国際クラス第 2 学年	385	10.4	100%
国際クラス第 3 学年	103	2.9	41.7%
一般進学クラス第 2 学年	23	0.2	0%

国際クラスにおいては，第 3 学年の達成率が低いが，その要因の 1 つとして，大会への参加は既に経験しており，本年度は論文執筆が中心的な活動になったため，課題研究発表等を除く，大会への参加を見合わせたことがある。また，研究課題に関わる様々な社会活動やセミナー等の研修に個々に参加している生徒も複数いるが，本年度はそれらを集計できなかった。

一般進学クラス第 2 学年の達成率の低さについては，本年度は SGH の対象となった 1 年目であるので，校内でのポスター発表を活動目標にしたため，校外での諸活動に対して意識を喚起する機会が少なかったことが原因の 1 つと考えられる。

以下の表 2 に主な参加先と参加数，表彰について記載する。

表 2　国内外の研修･大会･社会活動と参加状況

区分	内　容	参加数	表　彰
研修	全 7 回 G サロン	403	
	台湾研修	16	
	オーストラリア海外研修	9	
	高山グローバルフェスタ 主催：旭丘高等学校	11	
	国際ボランティアフォーラム 主催：関西学院大学	15	
	地域の国際化セミナー 主催：名古屋国際センター	10	
大会	名城大学外国語学部国際フォーラム 主催：名城大学外国語学部	9	
	SGH 校生徒成果発表会 主催：筑波大学附属坂戸高等学校	3	ポスター発表：宮田未稀（国際）
	SGH 甲子園 主催：関西学院大学・大阪大学・大阪教育大学	14	口頭発表：小出侑佳（国際） ポスター発表：宮崎詩織　渡邊紗彩（国際）
	クエストカップ 2016　主催：教育と探究社 後援：経済産業省・東京都教育委員会	37	佳作：柳町 浅井 斎藤 本郷（国際）
	高校生英語でプレゼンコンテスト 主催：東海学園大学	22	ともいき賞：新井 川内 福田 増田（国際） 奨励賞：梅田 大森 鬼塚 小出 堤原 永井 畑中（国際）
	高校生英語スピーチコンテスト 主催：愛知大学国際コミュニケーション学部	43	入選　吉中丞太（国際）
	国際ユース作文コンテスト 主催：五井平和財団	32	学校奨励賞　　入選 伊藤真彩（国際）
	いっしょに読もう！新聞コンクール 主催：日本新聞協会	32	
	IIBC エッセイコンテスト 主催：国際ビジネスコミュニケーション協会	70	学校奨励賞
	夏休み読書感想文コンクール　主催：プラン・ジャパン	5	
	国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト　主催：JICA	64	
	文教大学 50 周年記念エッセイコンテスト 主催：文教大学	12	入選　柿本大典（国際）
	絵本翻訳コンテスト　主催：神戸女学院大学	14	
	英語エッセーコンテスト　主催：関西学院大学	37	
	クエストエデュケーション 東海ミッションミーティング	7	
	クエストエデュケーション　東海ジャム	12	

	新聞切り抜き作品コンクール 主催：中日新聞社	69	佳作：加藤ひなた（一般進学） 努力賞：16 名（国際 3・一般進学 13）
	日台文化交流青少年スカラシップ 主催：日本工業新聞社・産経新聞社	17	
	地域の国際化セミナー 主催：名古屋国際センター	10	
	その他のイベントやコンクール	6	
社会活動	フードバンク活動	2	
	日本語支援活動	2	
	その他ボランティア	4	

また，今後の研修や大会への参加意欲を聞いたところ，以下の結果となった（図 1，2）。

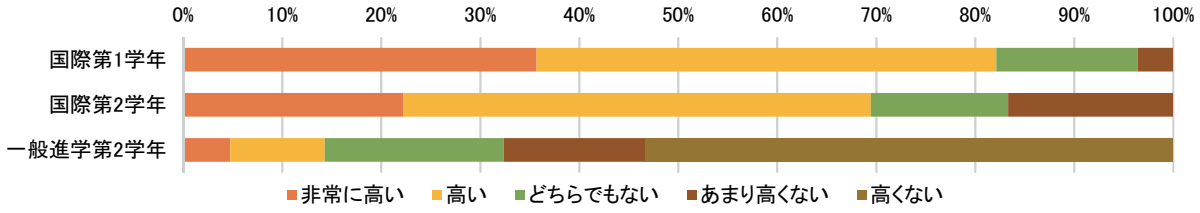


図 1　今後の外部研修へ参加意欲

外部研修についても外部大会についても，国際クラス生は 70%～80%が「非常に高い」及び「高い」と答えている。

一般進学クラス第 2 学年については，前述の通り生徒への紹介件数が少なかったことが第 1 の要因と考えられるが，一般進学クラスの約 7 割の生徒が部活動に所属しており，生徒の興味・関心が部活動に向けられていることも要因の 1 つと考えられる。

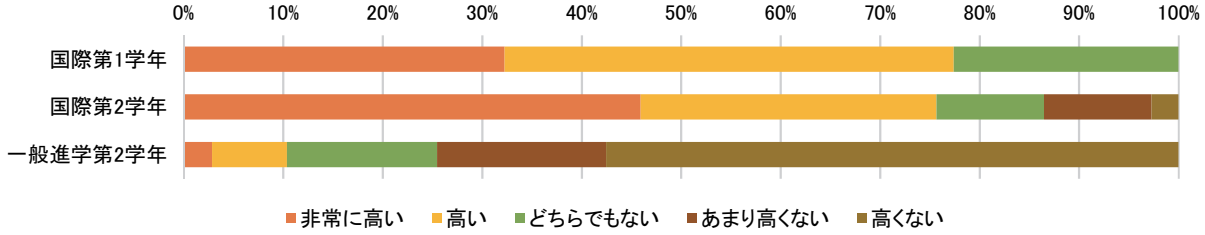


図 2　今後の外部大会へ参加意欲

次年度以降の課題及び改善点

国際クラスでは，ある時期までは外部の大会や研修等への参加を強く促している。一度でも参加すると，多くの生徒がそこで得られた経験に価値を見出し，その後自主的に研修等に参加するケースが多く，それが周囲や下級生にも伝播する良い循環を生んでいる。

したがって今後は，より高い質での参加を目指す。また，参加後は批判的精神をもって自分の変容や社会への影響を振り返り，今後の活動にどのように生かしていくのかを考察できるように指導したい。つまり，参加の成果に重点を置いた指導に移行していくよう努める。

一般進学クラスは，第 2 学年から SGH 活動が本格的に始まる。しかし，第 2 学年から始まることで SGH 活動が新たな負荷と感じる生徒も多数いると考えられる。今後は上記の国際クラス第 1 学年の例を参考にし，また，研修や大会等の時期や参加形態を工夫することによって，まずは参加回数を増加させる方策を検討する必要がある。

5（6）　【実践目標④】
プレゼンテーションを，国際クラスの生徒は年間 12 回以上実施する。

進捗状況・成果・評価

昨年度に比べると全ての学年で発表の回数が減少したが，全学年で達成できた（表 1）。減少の原因としては，第 1 学年，第 2 学年においては「English Presentation」（以下，EP）の授業で体系的にプレゼンテーションの手法を学習させることで，発表活動に慣れた生徒が増えており，発表回数を増やすのではなく，発表内容の質を高めるよう指導したことがあげられる。

第 3 学年においても，グループ内での発表やディスカッションの機会を増やしたため，全体で行う発表の数は減少した。次年度以降も同じ傾向になると予想される。

表 1　プレゼンテーション回数

学年	本年度の回数	昨年度の回数	実施授業（回数）
1	12	18	総合的な学習の時間における「多文化共生」(1) グローバル教科「グローバルプログラムスタディ」(4)・「EP」(6)，「英語表現Ⅰ」(1)
2	15	19	総合的な学習の時間における「課題研究」(2) グローバル教科「国際教養」(4)・「EP」(4)，「HR」(5)
3	13	19	総合的な学習の時間における「課題探究」(4)，グローバル教科「英会話Ⅲ」(7) 「現代社会」(1)，「HR」(1)

担当教員の聞き取り及びルーブリック評価からも全学年で以前よりプレゼンテーション力が上がった。EP では，第 1 学年はプレゼンテーションの基本技能を段階的に指導し，順調に習得した様子が見受けられた。第 2 学年は，即時的な英語での発信力をつけるべく，質疑応答を重視した結果，臨機応変に対応することに慣れてきた様子が伺えた。

また，次年度以降のプレゼンテーションに対する意欲については，第 1 学年，第 2 学年とも，90％以上が「非常に高い」，「高い」と回答した（図 1）。

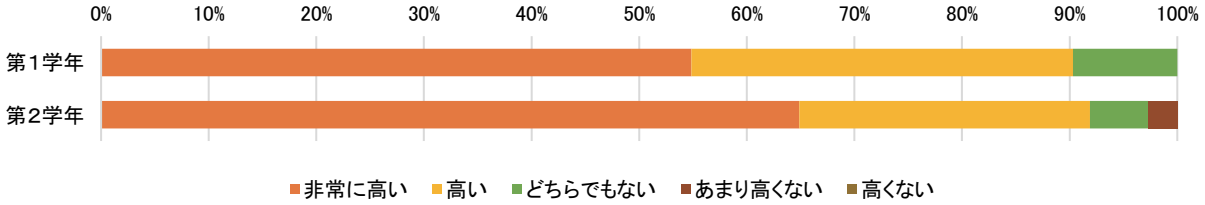


図 1　プレゼンテーションへの意欲（国際クラス）

この背景には，①授業内でのプレゼンテーションの実施，②校内の学年を超えたプレゼンテーションの視聴，③校外での他校生徒との協働学習の 3 点があげられる。

①では，前述の EP の他，様々な授業で ICT を活用しながら実施している（表 1）。

②では，他学年の発表の視聴機会を通して，「先輩のように発表できるようになりたい」等の前向きな意見が見られるとともに，互いに発表のスキルを分析する様子が見られた。

③の機会は増加しており，（前述「5(5)【実践目標③】参照）他校生との交流や大学教員等からの講評に「自分の課題が見つかった」「自信が持てた」等の声が聞かれ，自ら教授を訪ね，他校生とネットワークを構築する生徒も増えてきた。生徒の様子から，校外での発表回数とコミュニケーション・コラボレーション力やその意識は比例して向上するように推察できる。

次年度以降の課題及び改善点

課題研究の完成が第 3 学年後半であり，参加できない校外の発表機会がある。次年度は，課題研究の完成を早めることにより，参加しやすい環境を作る。

また，まだ即時に英語で発信することが苦手な生徒も多く，今後，生徒が考えを発信する機会を作るよう指導計画の改善を進める。第 2 学年，第 3 学年は，口頭発表の他にポスター発表を積極的に行い，自らの言葉で発信ができるようになることを目標とする。

5（7）　【実践目標⑤】

卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を，国際クラスの生徒は 100%とする。

進捗状況・成果・評価

指定当時，文部科学省から出された指標において，CEFR の B1，B2 レベルを実用英語技能検定 2 級合格として読み替えるとされていた。その後，英語 4 技能 資格・検定試験懇談会が発行した「資格・検定試験 CEFR との対照表」（http://4skills.eiken.or.jp/qualification/comparison_cefr.html, 2016 年 5 月 31 日更新）によると，CEFR の B2 レベルは，実用英語技能検定での準 1 級，TOEIC の得点に換算すると Listening&Reading（以下，L&R）で 785 点以上に相当するという発表がなされた。したがって，本報告書では，その基準をもって CEFR の B2 レベルと読み替える。

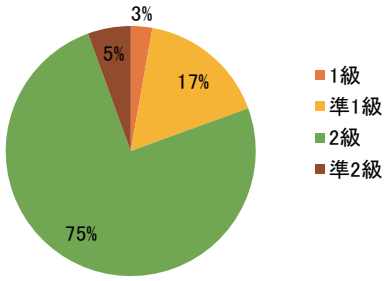


図 1　国際クラス第 3 学年
実用英語技能検定取得率

結果として，第 3 学年では実用英語技能検定で見ると 20%，TOEIC L&R で見ると 19%が B2 レベルに到達した（図 1）。

また，CEFR の B1 レベルを読み替えた，実用英語技能検定 2 級，TOEIC L&R550 点で見ると，それぞれ 95%，86%と（2017 年 3 月 1 日時点）（図 2）と，おおむね達成できたと言えるが，100%には届いていない。

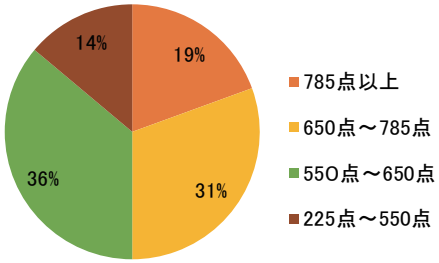


図 2　国際クラス第 3 学年　TOEIC 得点率

昨年度の報告書の改善点に，中位層・下位層の生徒の英語力向上が挙げられていた。入学時から英語に対する苦手意識を既に抱いている生徒も多く，英語の授業においては習熟度の高い生徒と低い生徒のそれぞれに合った学びがあるよう努めた。

また，「英語運用能力の向上実感」を聞いたところ，加重平均値で，国際クラス第 1 学年は 4.1，第 2 学年は 4.3，第 3 学年は 4.4 であり，非常に高かった。特に第 3 学年では，36 名中 35 名が「非常に高い（19 名）」「高い（16 名）」と答えた（図 3）。「どちらでもない」と回答した生徒も，TOEIC L&R の得点は第 1 学年時から 350 点上昇しており，目標を高く設定しているため自己評価が低くなったと考えられる。

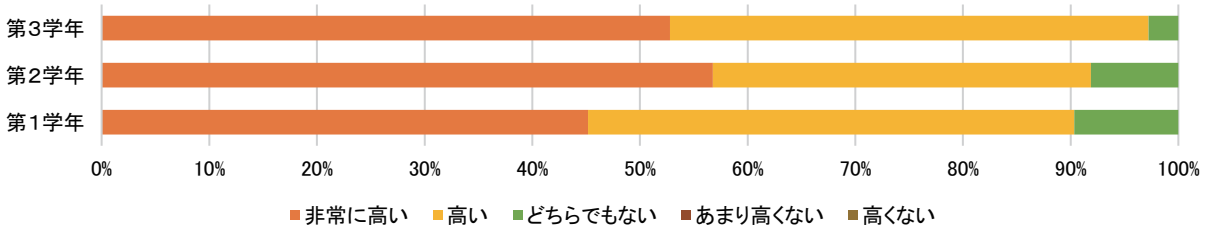
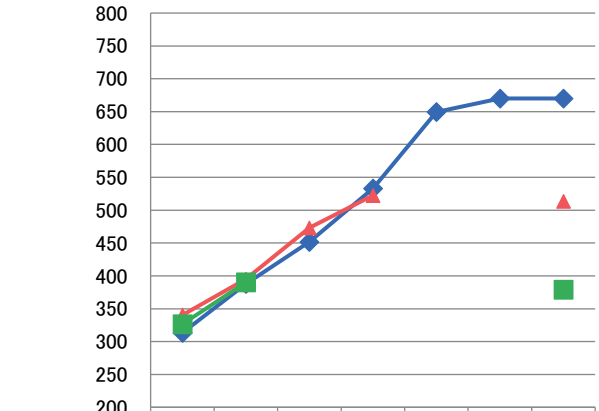


図 3　英語力の向上実感（国際クラス）

TOEIC L&R のクラス平均得点の推移で見ても，313 点（第 1 学年前期）から 670 点（第 3 学年後期）へと 357 点伸びており（図 4），B2 レベルには到達していないが，全体として英語力は向上していると考えられる。

さらに，「今後の英語学習への意欲」に関する 5 段階での回答を加重平均値で見ると，第 1 学年が 4.97，第 2 学年が 4.59，第 3 学年が 4.97 である。

第 1 学年，第 3 学年は 1 名を除き「非常に高い」，第 2 学年は，95%が「非常に高い（81%）」「高い（14%）」と答え，総じて言語習得に対する前向きな姿勢がうかがえる（図 5）。第 2 学年で「非常に高い」と答えた生徒が減少しているのは，目標値が高くなっているからと考えられる。



	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期	在学best
第3学年	313.3	387.7	451.7	533.1	649.4	670.0	670.0
第2学年	340.3	395.0	472.9	522.4			513.3
第1学年	326.6	390.0					378.9

図 4　TOEIC のクラス平均スコアの推移（国際クラス）

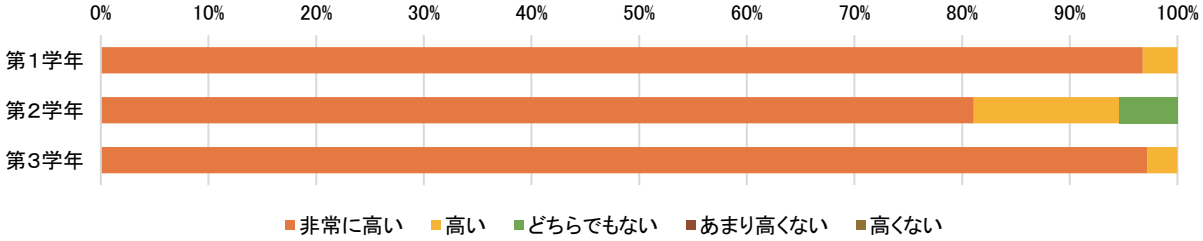


図 5　今後の英語学習への意欲（国際クラス）

これらの点から，本年度の取り組みにおいて，英語力の育成と生徒の意欲の向上には一定の成果が出ているといえよう。

次年度以降の課題及び改善点

英語力の向上実感や英語に対する学習意欲が高い生徒は多いが，目標には達成することができなかった。英語学習に関しては，一部の生徒だけが成果を上げるのではなく，一定数の生徒が成果を出し始めると，クラス全体の意欲が向上することが分かっている。そのため，より早い段階で，英語を使用する機会を増やし，クラス全員がより早い時点で B2 レベルに到達することを目指す。

実践目標の達成度を測る基準について，現在は基準が英検・TOEIC L&R の 2 点しかなく，次年度以降は CEFR-J の基準を参考にし，生徒の自己評価や教員の評価等も達成度を測る上の参考としたい。本年度は Can Do リストを活用することはできなかったが，次年度は Can Do リストの活用を図る。

5（8）　【実践目標⑥】

国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

進捗状況・成果・評価

国際クラス第３学年においては，スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校（以下，SGU）である国際教養大学，法政大学，立命館大学総合心理学部・政策科学部，立教大学経営学部，上智大学総合グローバル学部，関西学院大学国際学部への進学が決定している。その他，国際化を推進する大学や課題研究をさらに発展させることのできる大学（同志社大学グローバルコミュニケーション学部，南山大学経営学部，愛知県立大学外国語学部等）や，オーストラリアへの海外進学が決定している。

また，その他のクラスでも，東北大学，千葉大学，筑波大学，東京外国語大学，東京工業大学，名古屋大学，京都大学，広島大学等 SGU の国公立大学への進学が決定している。

在校生においては，第１学年では「探究を深めることのできるグローバルな大学」への進学意欲が高い生徒は 84%（「非常に高い（55%）」，「高い（29%）」）と高い値を示している（図 1）。第２学年では，当該大学への進学に意欲を持っている生徒は 81%（「非常に高い（43%）」，「高い（38%）」）であり，経年変化で見ると，昨年度（「平成 27 年度報告書，６目標の進捗状況・成果・評価と次年度以降の課題（8）【実践目標⑥】」参照）同様高い値を維持している（図 1）。

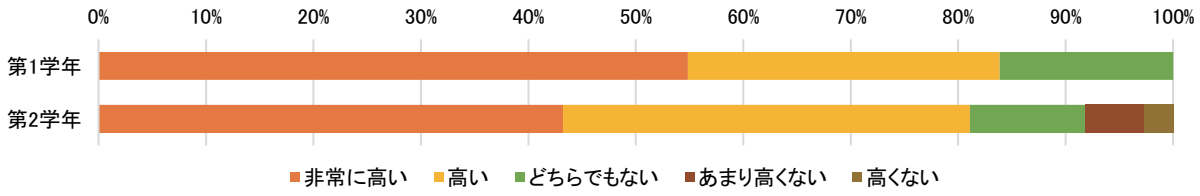


図 1　探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲（国際クラス）

また，「探究を深めることのできるグローバルな大学へ進学する意欲」の回答を導くことになったと考える要素を聞いたところ，両学年に共通して「英語力の向上」と「探究型学習」「フィールドワーク」の値が高い。両学年傾向の違いとして，「海外研修」は第２学年が高く第１学年は低い，「外部講師」は第１学年が高く第２学年は低い。前者についてはアンケート時点で第１学年はほとんどの生徒が海外研修未経験なのに対し，第２学年はほぼ２回以上の経験をしていることが要因に考えられる。その分，第１学年は外部講師による刺激を受け，後者の結果に反映されているものと考えられる（図 2）。

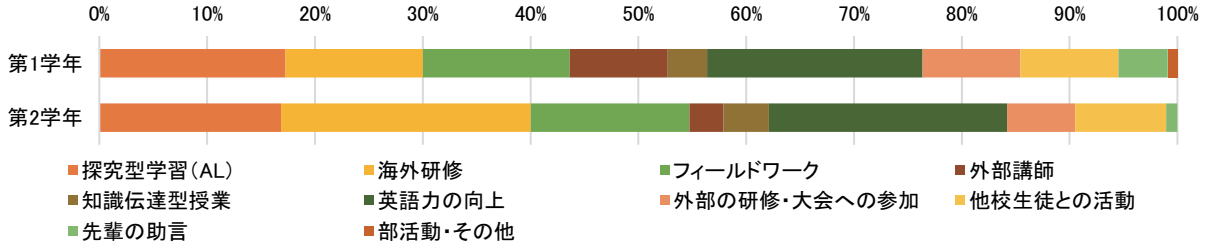


図 2　探究を深めることのできるグローバルな大学に進学する意欲を高めた要素（国際クラス）

グローバルなキャリア形成への意欲は，学年が進行するにつれて高くなっていることがわかる。第１学年では意欲の高い生徒が 74%（「非常に高い（55%）」「高い（19%）」），第２学年は 89%（「非常に高い（38%）」「高い（51%）」，第３学年は 97%（「非常に高い（75%）」「高い（22%）」）という値を示した（図 3）。

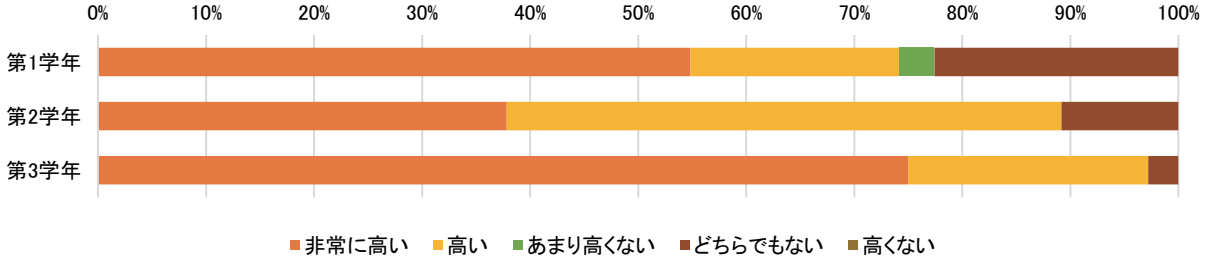


図 3　グローバルなキャリア形成への意欲（国際クラス）

「グローバルなキャリア設計の意欲」の高める回答を導くことになったと考える要素を聞いたところ，両学年とも 2 割程度の人数が「探究型学習」をあげ，第 2 学年の約 3 割が「海外研修」をあげている。第 1 学年は前述の通り「海外研修」未経験の生徒が多いため，第 2 学年に比べ値が低い。「英語力の向上」要素は，両学年ともあまり高くない（図 4）。

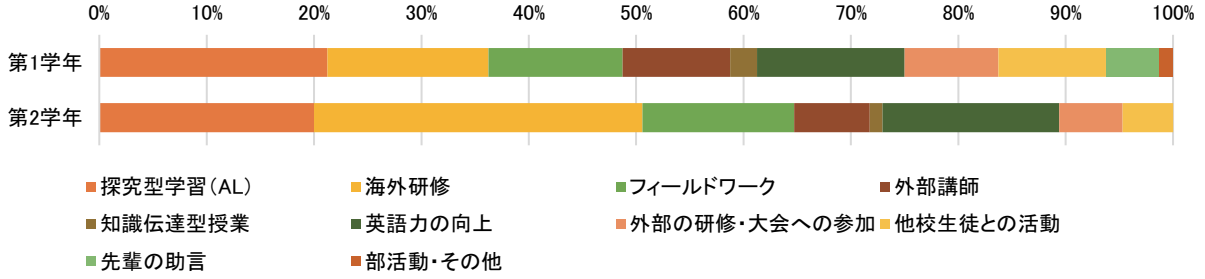


図 4　グローバルなキャリア形成への意欲を高めた要素

すなわち，グローバルなキャリアを設計する意欲は様々な要素から喚起されるものの，大学進学に関しては英語力の向上が欠かせないととらえていることが分かる（図 2，図 4）。これは昨年の結果からも同じ傾向が読み取れた。（「平成 27 年度報告書，6 目標の進捗状況・成果・評価と次年度以降の課題（8）【実践目標⑥】」参照）

次年度以降の課題及び改善点

SGU をはじめとした国際化を進める大学は関東・関西に多く，そういった地方や海外の大学への進学が，経済的に叶わないケースも少なくない。そのため中部地方の大学が，よりグローバル化に力を入れていくことが求められる。本校の SGH 事業を通して，この地方の大学に働きかけることも必要であり，Meijo Global Festa 等を広く活用したい。

また，生徒の高いグローバルなキャリア形成や大学進学への意欲を実現するための方策として，以下のような取り組みが必要と考える。

一つは生徒達に SGU を始めとした国際化を進める大学についての情報をアナウンスし，それらの大学で実施されるイベント等への参加を積極的に促すこと。また，それらの大学の教員や卒業生等を招聘し，研究やキャリアの一端に触れさせることである。

同様に受験生としての学力を高めるために，全校的にも推進しつつある「探究活動」を新方式の受験に生かすことや，英語の 4 技能を伸ばすことが今後の課題といえる。